

504
223

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁸m 1 2 3 4 5

始



36.3.31

504-223

THE RECONSTRUCTION OF THE
MODERN CHURCH

BY
REV. AKIRA EBISAWA

現代教會改造論

海老澤亮著



警醒社書店



牧會第十年の記念にあつて
わが若き日よりの不束を忍び寛
容をもて改造の企てを援け今此
主張を世に公けにさせたるわが
札幌教會の愛兄弟に長い友誼と
愛護の感謝のために謹んで此一
つの小著をささぐ

序

基督教會の回轉期

基督教會の歴史を繙くものは、世界に於て最大多數の信徒を有し、單に數の上のみならず、質の上に於ても最上位を占むること見做されてゐる基督教會が、幾度もなく危機に瀕したることあるを認むるであらう。過去に於ては幸に神の攝理により、その都度之を切り抜ける事が出来た。而して只單に切り抜けたこと云ふに止まらず、その度毎に基督教會の基礎を強固にし、量に於ても、進歩發達の跡を残してゐることは事實である。併し我等の考ふべきは現代教會が果して危機に遭遇して居らぬであら

うかご云ふことである。

最近歐洲大戰の際に於て、現代の基督教會は何の點から見ても、立ち遅れの感があつたことは、遺憾乍ら認めねばならぬ。かの開戦の當日即ち一九一四年八月二日には、世界各國の基督教會代表者等が、瑞西のコンスタンスに基督教平和會議を開くこのことで、既に先發者達は續々到着し來り、旅館の二階に宿泊して居つたのである。然るに何たる皮肉ぞ、その時階下に於ては宣戦の布告があつたと云ふので大騒ぎをして居つたと云ふ、之に依つて見るも明かなる如く、この基督教平和會議に集まりたる人々は何れも各國の宗教界に於ける重鎮たるにも拘はら

ず、己が足下より湧き起らんとする戦争に就て何等知る處がなく、且つ知つても如何ともする事が出来なかつた。時勢を観ることに於て何たる迂濶なことであらう。又何たる無力なことであつたらう。斯かる場合に於て我等クリスチアンとしては、戦争の勃發を防止する爲に努力するのが當然なすべき事であつたかも知れない。然るに防止どころではない、全くその圏外に立つて傍觀せしめらるゝに過ぎなかつたわけである。

然らば、愈々開戦となりたる時、クリスチアンとして盡すべきを盡し、爲すべきを爲し終つたかご云ふに、後れ馳せにあれこれと努力したことは努力した、併しこれは凡て消極的なことで、

戦争の惨禍を軽くすることは少しも出来ず、たゞ各國の恣に荒れ廻るにまかしたやうなわけで、今日から考へて遺憾の跡を歴史上に止めてゐるやうに思はれる。

戦後に於て、基督教會は大戦の著しき經驗によつて覺醒し、今後この惨禍を繰返へすことなからん爲に、或は國際聯盟の成立に、或はワシントンに於ける軍備縮少會議の成功の爲に、大に努力するところがあつた。而して後者は亞米利加に於ける基督教會の大努力により、その効を奏したと云つてよい。その後漸やく各方面のクリスチアンの中に、世界の表面より戦争を撤廢し、所謂人類相食む事なき無戦世界を實現せんものこの、眞

面目なる努力が爲されつゝあるやうな有様である。

現代の基督教會は社會よりその存立の理由を疑はれてゐること云ふやうな、危険に瀕してゐるものと云つてよからう。これを如何に切り抜け、如何に回轉せしめて行くかに、基督教會の運命はかゝつてゐる。吾人は基督教會の力を信するが故に、過去に於て所謂危機なるものを、幾度もなく回轉せしめた如く、此度もこれを回轉せしむることを信するものである。

最近手にしたるアウトルツク誌上に於て、同誌が「基督教會は現代に何を意味するか」この問題を掲げて、廣く寄書を募集してゐるのを見た。今その内容なるものを閲するに、

(一) 貴下が耳にしつゝある説教は何程貴下の靈的及び知的要求を充しつゝあるか。

(二) 基督教會の禮拜は何處まで人類の要求を充し居るか。

(三) 教會は社會に對して何等かの勢力を及ぼし居るか。

(四) 貴下の子供に對して何の點に成功し、何の點に失敗しつゝあるか。

と云ふが如きものである。之に依つて見るに、基督教會存立の理由を確にせんとする努力のあることが出来る。兎に角、基督教會も從來の遣り方では不充分である、何か新題目を

掲げて立つか、或は教會内に新改革を施して勢力を新にするか、いづれにしても社會に於ける存在の理由を一層明確にし、以て教會新回轉の時期を劃し度いと希ふてゐることは事實である。

偕て、我國の基督教會は今何を爲つゝあるか、これは吾人が大に知り度いと思ふ點である。教會の外に、即ち一般社會に、宗教を要求するの聲は可なり盛んにきこえるが、教會内に於ては何處に之に對する運動を爲しつゝあるか。各教派を通じてこれ云ふ對策を講じては居らないやうである。換言すれば基督教會は舊來の慣習に甘んじて、その日その日の用事を充し居るに過ぎない、何等新題目を掲げ來つて、舊來の慣習を破つてまでも、

使。命。と。信。ず。る。こ。の。爲。に。立。つ。と。云。ふ。生。命。の。躍。動。が。な。い。や。う。に。思。は。れ。る。

教會内部のこゝを考へてみても、之を大戰以前に比して、その勢力と云ひ、その感化力と云ひ、幾分か減じて居るのではあるまいかと疑はれる位である。教會に參集し來るもの、數も全般からみて決して増加してゐることは言はれないやうである。外部に對するこれと云ふ活動もなく、内部の力また充實し居ること稱し難いとするれば、我國の基督教會も亦危機に瀕するものと言はねばならぬ。如何にしてこの危機を切り抜け、新回轉の時期を劃するか、これ吾人の大に研究を要するところである。

世界のクリスチアンは今や非常な努力を以て、教會の回轉期を作らんとしてゐる、或ものは既にその教育的使命に於て、その社會的福音に於て、新方向を握り得たりと稱するものすらある位である。我が國の基督教徒たるもの大に覺醒し、基督こそ教會の爲に、その内的生命の上にその外的活動の上に、一新回轉を劃する爲に、今日なしつゝある以上の努力を捧げねばならぬ。

教友、海老澤亮兄爰に見る所あり、其經驗と抱負とに基づき「現代教會改造論」を發刊せらるゝに際し、本論を其卷首に掲げらるゝは、余が光榮とする所である。

大正十二年六月

宮川經輝誌

10

緒論

世界大戦といふ濾過池を通つた人類の思潮は、今や著しい轉向を始めた、そして新らしい時代と共に、新らしい秩序の建設のために、あらゆる方面の改造が叫ばれてきた、而るに此思潮の源泉をなし、其指導原理であり、精神生活の基調である宗教の側には、比較的革新の痕も見えず、又改造の叫びも尠ない、宗教は生命なき慣習の形態と化石したのであらうか、それとも永遠の眞理を有する宗教は、其一切が永久不變の絶対性を帯びて居ると考へられる爲であらう歟。

新時代の社會的組織は基督教社會觀に立脚し、其國際的秩序は基督教世界觀に外ならない、そして之等は社會改造の強い抑え難い勢力となつて、現代人の心を支配してゐる、斯く外部の改造を促したる基督教會が、夫自身之に對應する内部の時代的革新を企てないならば、宗教は教會の外に脱出し去つて、教會を生命なき形骸として遺棄するであらう、新時代の子は古い革囊に容れられないからである、之れ教會の改造を必要とする所以である。

近時思想界の一大變革期に際して、屢々宗教の衰退をいふ者あるは、果して其真相を捉え得たものであらうか、基督教は世

界大戰の勃發を阻止する事をせなかつた故に、人心に全く其權威を失墜したといふは、果して眞實であらうか、事實は其反證を擧げてゐる、斯かる疑惑を以て殊更に宗教の衰頹をいひたがる者は、皆唯物思想に執はれたる過去の人が、自身を現代より葬る斷末魔の悲鳴に過ぎない、斯かる見解により宗教を無視して社會改造を策する者は、同じく物質主義に中毒して野獸性を發揮し、自己本心に對する叛逆の叫び聲を擧ぐる血迷ひに外ならない。

宗教は常に其形態を變ずるけれども、益々進化して已まない靈的生命である、偶々一人が之を無視する事も出來やう、一時

代が之を閑却する事もあらう、一社會が之を禁壓する事も出來やう、けれども聽て恢復せねばならぬ内的生命の流れであり、人性本然の要求であり、見えざる生命の力である。

されど時代は推移し、人智は進歩し、民心は向上し、生活の様式は革まり、慣習制度も亦常に變化して已まない、永遠のものとは不變であるとしても、獨り宗教のみが何もかも永遠性を有して居るであらうか、少くとも其表現の様式は、時代と共に進化すべきものであらう。

總ての生命あるものは不斷の進化である、宗教の中心眞理といふ靈的生命も亦、外側の皮殻を裂いて開展してこそ、其生命

を發揮するのである、天啓であるからといふて、其發表の様式にまで、批評研究を許さないといふ保守的の態度は、恐ろしい獨斷さいはねばならぬ、基督教の根本教理さへも、其解釋の方法即ち神學は、時代と共に改造さるべきものであり、其教會の組織制度の如きは、當然研究を重ねて改造さるべき筈のものであり、其活動の方式に至つては、常に改善進歩を見なければならぬ性質のものである。

改造の叫びは破壊の爲でなくして、眞に再建（リコンストラクシヨン）の爲に擧げられなければならぬ、而も不思議に思はるるほど、宗教界は保守退嬰に甘んじてか、舊套を纏ふて晏如として

居り、舊習を繰返して小規模に固形してゐる。人類救済の大理想を有する教會は、爰に目覺めて來なければならぬ。

科學思想と民主主義とを雙壁としてゐる現代に於て、著者は教會改造の方針として爰に二つの途を選んだ、一は社會的福音の高調であり、他は宗教々育の擴充である、現代教會が其失はんとする生命を復興すべきは、當に此二途あるのみと信ずるからである、基督教が長く包容してきた此二つの生命の道を、遂近代迄發現し得なかつたのは、寧ろ不可思議な事實である、否今日に於てさへも、尙且之を諒解し得ない基督者さへ多いとは、又何たる時代錯誤であらうか。

基督教が教育的理想に立たねばならない事は、宗教々育界の一豫言者ブツシユネルが、夙に「クリスチヤンエデュケーション基督教々養」を公けにされてから、漸やく世の視聽を惹くやうになつたのであるが、それも僅に三十餘年來の事である、而もそれが多數の共鳴者を得たのは、僅に十數年此方の事である、併し之は靈育の理想的教師たる基督の根本方針であり、更に溯つては猶太教の傳へ來つた教訓であつたが、不幸にして其眞意は斯く長らく埋没されてゐたのである。

社會的福音も亦同様である。近代に至る迄教會の此方面の事業は、所謂特權階級の遊戯的慈善救済のやうな趣きがあつた、

僅に此世紀になつてから、ビーボデイやラウセンブツシユの如きが叫び出して、稍々人々の注意を喚起するに至つたものであり、而も多數の同意者を見出したのは、僅に大戦後の數年以來とも見らるゝ程である、併し基督の總ての教説は皆社會的福音の色調を帯び、其終局の目標たる神國の教は、純然たる社會的福音に外ならなかつた。而已ならず初代教會は不充分ながらも其實施をさへ企てた程であり、更に溯つてはモーセが同胞の勞働問題乃至産業振興の爲に努力した事も、幾多豫言者が當面の政治的、社會的問題を提げて起つた事も、史上照乎として光彩を放てる事實であつた、斯く數へ來れば基督教會が、之等の眞

理を發見する事の、如何に遅かりしかに、今更の如く驚くの外はない。

宗教は完成したる生産物ではない、不斷に進化し開展すべき生命である、希臘、拉典、チユートン、スラブさてはアングロ・サクソンも、各々其特色ある見識を以て、基督の中に眞理の寶玉を發掘してきた、そして二千年後の今日に及んで掘り當てたものゝあるやうな感がする、けれども尊い眞理の種子が尙も未開發の儘に秘められてゐる、東洋に於て發見せらるべき領域も亦殘されて居るであらう、世の總ての事物が外包の改造によつて、其内容を發現し得べきものこそせば、基督教も亦其自然法

に除外さるべきものではない、之れ試みに現代教會改造の産聲として、本書の公けにさるる所以である。

問題は大きい、事業は容易でない、斯くも無造作に改造をいふのは、聊か無謀の譏を免れないであらう、されど本書が斯かる方面に心を寄せつゝある人々に、一つの暗示を呈し得れば、著者の望は即ち足るのである。

著者は斯かる見解と方針とを抱いて、過去十年間自ら改造を試みてきた、此所信の故を以て、多年信仰の友人とも自ら疎くなり、幾多保守主義の老年者を憂へしめた心の痛みも、聊か経験してきた、けれども現代に於ける總ての改造運動の完成の爲

に、其指導をなし得べき精神的機關は、基督の教會であるといふ確信に立てるが故に、基督教會將來のため、基督教の前途のため、延いては我國民の幸福のために、著者は一般基督者が舊時代の思想的慣習より解放されん事を望み、世の識者も亦生命ある信仰を、爰に見出されん事を期待し、今は幾分の犠牲を拂つても、先づ現代教會の改造を叫ばんとする所以である。

雪の花さく梢を眺めつゝ

著者識

一九二三年四月下院

例言

- 一、著者は本書の起稿に際し巻頭より秩序的に全篇を書き上げたのではない、牧會の傍ら折に觸れて執筆したものと、豫て各種新聞雜誌等に寄稿したものとを編纂したのである、故に間々意義重複の點ある事を免れない、敢て其前後の關係を遮斷せぬやうに、素との文體の儘に残して置いた事を諒とせられたい。
- 二、教會改造の叫びは聊か大袈裟に響く嫌がある、けれども著者は教理其もの即ち神學改造の問題には殊更に餘り深く觸れてゐない、唯僅に暗示を呈した丈けであつて、主として實際の方法論に重きを置き、多少自身の實驗し又確信する點を高調せんとした、蓋し神學改造の問題は今後に俟たねばならず、又他に其人あるべきを信ずるからである。

三、本書は新時代と現代教會との關係より、教會の革新と其使命と其教育等、前の部

に於て、重に改造意見としての理想論を掲げ、更に後の部に於て、教會の宣傳、奉仕及び之に應ずる教會内部の組織、之が指導者たる教職の問題等、實際問題に就て述べた。

四 本書の起稿に方り参照したる書籍は二十餘種であるが、就中最も多く参考と致したものは、重に大戰後の問題を論じた處の左の數冊である。

Strayer : The Reconstruction of the Church.

Lynch : The Challenge.

Lynch : The New Opportunity of the Ministry.

Coffin : In a Day of Social Rebuilding.

Howerton : The Church & Social Reforms.

Mathews : The Church & the Changing Order.

Ellwood : The Reconstruction of Religion.

Reisner : Workable Plans for Wide-Awake Churches.

Jackson : A Community Church.

Hodges & Reichert : The Administration of an Institutional Church.

Veach : The Meaning of the War for Religious Education.

現代教會改造論

緒論

目次

一、現代教會と新時代……………	一—四五
(イ) 新時代の創建……………	一
(ロ) 新時代と平和……………	六
(ハ) 新時代のプログラム……………	一〇
(ニ) 新時代の豫言者……………	一六
(ホ) 新時代と教會……………	二〇
(ヘ) 新時代の挑戦……………	二六
(ト) 新時代と國家……………	三六
(チ) 新時代と新人……………	三九
二、現代教會の革新……………	四六—五七

(イ) 教會の時代の革新	四七
(ロ) 福音の社會民衆化	四八
(ハ) 社會主義と基督教	五〇
(ニ) 教會の社會的使命	五二

三、現代教會の使命……………五八—七七

(イ) 東洋教化の眞理	五九
(ロ) 東洋教化の使命	六七
(ハ) 宗教生活の革新	七二
(ニ) 靈界開拓の使命	七五

四、現代教會の教育……………七八—一二〇

(イ) 教會教育の缺陷	七九
(ロ) 宗教教育の社會化	一〇〇
(ハ) 現代教會の講壇	一〇二
(ニ) 現代教會の指導者	一〇六
(ホ) 教會制度の改造	一〇八

(ヘ) 教會生活の自由	一一〇
(ト) 現代教會員の自覺	一一三

五、現代教會の宣傳……………一二一—一三四

(イ) 教會宣傳の意義	一二一
(ロ) 一般的注意の喚起	一二三
(ハ) 教會廣告の心理	一二五
(ニ) 教會廣告の方法	一二八
(ホ) アツピールの態度	一三一

六、現代教會の奉仕……………一三五—一五〇

(イ) 社會奉仕の反應	一三六
(ロ) 社會奉仕の動機	一三八
(ハ) 社會奉仕の方法	一四〇
(ニ) 現代教會の方針	一四三
(ホ) 教會の現代的奉仕	一四六

七、現代教會の組織……………一五一—一六六

(一) 教育的教會の原理……………一五一

(イ) 教會組織の改造……………(ロ) 現代組織の時代

(ハ) 組織的活動の効果……………(ニ) 教育的教會と傳道

(二) 教會事業の組織……………一五七

(イ) 市民の靈的機關……………(ロ) 教會事業の分類

(三) 教會事業の組織……………一六〇

(イ) 教會員の組織的活動……………(ロ) 教會員の組織的訓練

(ハ) 教會プログラムの組織

八、現代教會の教職……………一六七—二〇八

(一) 牧師の人格的資質……………一六七

(イ) 何に譬ふべき乎……………(ロ) 信任さるゝ者

(ハ) 靈化されし者……………(ニ) 訓練されし者

(三) 牧師の心理的資質……………一七一

(ア) ビジョンを見る者……………(イ) 直覺力ある者

(ハ) 同情心ある者……………(ニ) 冒險をなす者

(ホ) 熱情溢るゝ者

(三) 現代牧師の職能……………一七九

(イ) 代表者としての牧師……………(ロ) 豫言者としての牧師

(ハ) 祭司としての牧師……………(ニ) 教師としての牧師

(ホ) 牧師としての態度

(四) 教壇上の理想……………一九三

(一) 説教の主意……………(二) 説教の思想

(三) 説教の組織……………(四) 説教の時間

(五) 説教の技能……………(六) 説教の延長

(七) 説教の背景

(五) 教壇上の抱負……………二〇一

(一) 獨創的見識……………(二) 指導的能力

△附録

札幌組合教會大正十二年教會暦

一、現代教會と新時代

人類思潮の變遷に際し、其生活の過渡期に當つて、現代基督教會は抑も如何なる使命を帯び、如何なる活動をなし、如何なる職能を發揮し、如何なる指導を爲すべきであらうか。教會が二千年來繼承し來つた福音の要旨は人類永久の所有である、けれども今に至る迄發揮せらるべくして寧ろ埋没されてゐた基督の眞理も亦、新しい時代の光明に照らして高調されねばならぬ、時代の推移と共に眞理宣傳の様式も亦自ら新にされねばならぬ、故に制度組織の革新が當然緊要となつてくる、そして先づ第一に現代及び次の時代を了解し、其招徠の爲に先驅者となる事が、現代教會の理想であり抱負でなければならぬ。

(イ) 新時代の創建

前古未曾有の世界戦亂が終熄すると共に、其一般に及ぼせる影響は漸次明瞭とな

り、人類は皆期せずして、新天地新人の創造に參與する事となつた。

「視よわれ新らしき天と新らしき地とを創造し、人さきものを記念する事なく、之をその心に思ひ出づる事なし、されど汝等わが創造する者によりて永遠にたのみよろこべ」(舊約イザヤ書六五ノ一七)とある如く、平和の曙光はやくに見えそめて、愈々新時代の曉を認むる事が出来る、星移り物變り人類あつて以來種々なる時代はあつたが、現代の如く希望に満つる時はない、歴史は繰返すといふが必ずしも爾か斷定を許さない、歴史は不斷の進化である、戦亂は此進化の過程に於ける革新期であつた、舊生命は亡びて新生命が發揮せられ、舊制度が廢れて新制度が建設せらるべき爲であつた、爰に舊時代を葬る爲の悲哀が味はれたのである。

神の世界には常に新陳代謝が行はれる、今に至る迄人類の理想的進化を阻害しつゝ、あつたものは悉く破棄されなければならぬ、大戦亂は舊式の人生哲學と誤てる軍國主義と形式的の國家觀とが生み出したものであつて、之等を葬り去る迄に人類

總ては自ら招いた大なる苦惱を経験した、今にして始めて舊思想と舊制度との禍を解してきた、而して識見ある者は來るべき新時代を翹望し、燦然たる物的文明に眩惑されつゝあつた迷夢より醒めてきた、創造の神は如何なる人力の反抗にも係らず遂に其聖旨を成さんが爲に、禍を轉じて福となし給ふ、戦亂による萬物の破壊は、更に永遠の建設をなさんが爲であつた。

世は血に渴いてゐた、地上は猛獸の相闘ぐ修羅場と化してゐた、一切の秩序は破壊せられた、上長に對する尊敬は失せ果て、若さを誇り且美やんだ、女性本來の美德は棄てられ皆男性化しつゝある、飢餓に瀕せる兒女等も冷笑の的となつた、科學は更に大なる虐殺の爲の手先となり、通商も亦其殺戮を助けた、富の力も美名の下に用ゐられて、幸福なる家庭を破壊し、平和なる學校教會を壊亂し、平安の町々を新らしき墓地と化した、嗚呼人類の文化は危機に瀕せるか、而も此間に神意は着々と進捗してきた、人は死生の巷に往復して愈々眞の精練を受けた、塹壕の祈、陣中

の叫びは人心の奥底より迸る信仰の聲であつた、世界は宗教的に覺醒しつゝある。舊制度、舊秩序、舊思想、舊習慣、舊天地、舊人類の爲に砲の響は世界に轟いた、軍國主義、唯物主義、個人主義、宗派主義を葬る鐘の聲は物の哀れを傳へてきた、天蓋破れ地軸裂くるの概は、舊天地が碎けて新天地が創造せらるゝ生みの苦であつた。否戦後の世界は今も尙其産みの苦を嘗めつゝある。

九百萬人の精靈を消耗し、三千萬人の負傷者をつくり、之に對應する幾千萬の寡婦孤兒を地上に残し、剩へ直接戦費五千億圓を消費し、間接戦費は六千九百億圓に上つたといふ經濟的消耗を來して、窮乏の苦難を嘗めつゝある世界が、之れ程の苦を以てしても、未だ新しい人類と時代とを生産する事が出來ないとすれば、之は餘りに酬われぬ惱である、世は恰も異状妊娠の如くに順當なる生産を妨ぐるものが伏在してゐるのであらう、此惱みを軽減し、早く新時代新人の生れ出でん事を望むのは萬人の熱求である、現代教會は進んで之が爲に助産婦の慈悲ある努力を傾けなけ

ればならぬ。而して大戰の結末に際し、ベルサイユ宮殿の平和會議に於ては、確かに單なる「領土の市場」(マーケット・オブ・テリトリ)に終らずして、人類永遠の平和の爲に、新しいものが生産されねばならないといふ理想が見えた、國際聯盟は其の一機關である、現代教會は飽迄之が後援者とならねばならぬ、米國の有力なる説教者等は、何故に米國諸教會が此重大なる機關に對して今も尙懷疑を有して居るか、何が故に爾かく冷淡にして對岸の火災視して居られるかを怪しむと述べてゐる、我日本に於ても動もすれば一般に之に對して冷笑的態度を取つてゐる、理想の低級なる識見の淺薄なるが爲に充分之を了解し又同情し得ないのである。

(ロ) 新時代と平和

今や人類社會は新時代に入らんとしてゐる、それは腕力より理性へ、權勢より平和へ、復讐より寛容へ、帝國主義より人道主義へと、進化すべき過渡の時代である、唯

物論上に立てられし從來の文化は全然失敗に歸して、爰に精神的文明の創建が始められる、今更ながら文化を誇りし人類は自己の野蠻に驚いたからである。

新時代を齎らすべき世界的事業は平和の運動である、人類の幸福を増進せんが爲には、恒久的平和の基礎が据えられなければならない、之は第一世紀に於て最初の大平和論者が唱導されて以來、累代の思想家が主張し來つた大理想である。エラズマスも論争を戦争に依つて決するは基督の教訓に反する「猫の方法」であるといひ、和蘭の若き學者ユイゴ、グロチアスは始めて萬國裁判制を唱へた、第十六世紀に於て既にヘンリー第四世は歐洲諸國の聯盟を圖り、中央政府の設置國際軍の編制を稱へられた、大哲カントも亦「法廷は戦争に代り、國際聯盟は利己的個人主義に代り、條約は大砲に代り、民主々義は專制主義に代る」べきを説かれた。今にして始めて先覺の理想が稍々人類の思潮を動かすに至つた所以である。

基督教的道徳が國際間に實行せらるゝに及んで、世は始めて生活の安定を保障せ

らるゝに至る、今や人類は思ひ切つて基督教主義に前進するか、若くは保守頑冥舊思想に執着して、再び蠻界に墮落するか、二つに一つの道を選ばねばならぬ。此時に際し現代教會は人類の眼前に此理想を提示すべき責任がある。

更に華府會議は人類史上に一紀元を劃した、基督教會の輿論喚起と其強大なる後援とに依つて、ハーヂングは之を開催する事が出來たのである、之が爲に米國諸教會の一致したる活動は實に目覺しいものがあつた、現代教會は斯かる高遠の意義ある、人類の幸福に關係深き問題を取扱ふべき責任がある。

國際的會議に於て牧師の祈禱を以て開會したるは之を以て嚆矢とするであらう、此會議の爲に國務卿の手許に提出されたる請願の數は一千百十三萬七千八百八十七人の多きに上り、更に終結迄には其數實に一千三百八十七萬八千六百七十一人の多數に達したといふ、以て如何に平和は現代の民心を支配し居るかが判斷せられやう。

我國に於ては華府會議の結果に關し、兎角批判的に其不成功を言はんとする傾き

がある、けれども日米間に低迷しつゝあつた大平洋上の靈的低氣壓を一掃し、十年海軍休日をして著るしい軍備の制限を敢てし、國民を此武裝的競技の重き負擔より解放したる事實は、決して輕々に看過する事が出来ない、現代教會は新時代の民心を率ふるものが基督の教説に根據を有する事實を知らば、大なる自覺を以て斯かる國際問題に對しても、爲政者を督勵して人類の福祉を齎らす爲に努力せねばならない。軍國主義者は武器と權勢との古い方法に立籠り、平和主義者は法理上の新方法によつて事を決せんとする、前者は過去に執着し、後者は將來を展望する、そして此二大思潮の勝敗は遠からず決濟を見るであらう、而も大戦亂の經過は明白に其結果を暗示してゐる、今後一國は他の一國に對して宣戰を布告する場合事實上、全人類に對して戰を宣する所以である、何となれば所謂中立國の蒙る打撃は必ずしも交戰國に劣らぬものがあるからである、戰爭は斯くて人道に許すべからざる罪惡となつた、世界の將來は基督教主義の基礎の上に建設されなければならぬ。

世界民心を動かしたつゝある現代人類の思潮は、偉大なる基督の靈能の進出に外ならない、何人も單に一時的に一國の利害の爲にのみ圖ることは出来ない、ウキルソンの所謂「人類より委託されたる責任」を果す程の、大理想と抱負とが既に表はれてゐる、蓋しかの大戦亂の大犠牲を拂ふて、而も人類の贏ち得る處僅に姑息の平和に止るあらば、之は史乘に長く現代人の汚辱を残す所以である。

平和の招來と共に我同胞に取りての惱みの年が來る、それは從來比較的戰亂の惱みを受けなかつた我邦が、今や思想上の惱みを覺えてきたからである、犠牲の少なかりし丈け戰爭の慘禍を感ずる事鈍く、未だ豁然として世界の平和思潮に乗出すべき思想上の準備がない、而して暗黙の惱みがある。

之を我邦將來の爲に計るに、吾等は飽迄世界と共に前進せねばならぬ、徒らに舊思想に囚はれて將來を誤つてはならぬ、近時學者等が厥起して保守思想を撲滅し、國民の指導を以て任ぜんとするものも亦、蓋し爰に見る處あるが爲であらう、而も

吾等基督者に取つては之は年來の主張に外ならぬ。

吾等を以て之れを觀れば、我邦の世界に於ける發展は、保守的軍國思想の國民てふ疑惑が一扫せらるゝの時、換言すれば我邦が世界一般に基督敎國と承認さるゝ迄の信任を受くるに至つて始めて安固なるを得、且人道主義を楯として世界に對し自由を要請し得るの強味を有する所以と確信する。之れ現代敎會が殊に國民同胞の靈的救済の爲めに前進すべき使命を感ずる所以である。

(ハ) 新時代のプログラム

來るべき新時代とは如何なるものであらうか、世の進運と共に推移せんが爲には先づ爰に國民の前途を展望して誤らざる方針を確立せねばならない、今にして尙舊思想舊制度に執着するの餘り、保守退嬰に傾くやうであつては、我が民族の將來を誤る虞なきを得ない。現代敎會は明確に之を指摘すべきである。

第一に新時代は世界的意識の發揮せらるべき時代である。世界大戰以來萬事は此趨勢を以て進んで來た、凡そ世界共通のものに非れば何等の權能をも有せぬに至つた、地方的民族的のものを以て世界に推し及ぼし、他を律する事は到底不可能となつた、汎獨主義が神意であると妄信して戰禍を構へたものは、世界的協力により抑壓せられた、一國のみの特殊の哲學は最早や許されない、今にして若し世界の氣勢に逆行して自ら特殊部落を構成し、之に立籠るが如き國民あらば、それは到底新時代に生命を發揮し得ざる時代遅れである、いふ迄もなく宗教も亦此趨勢に漏るゝ事は出來ない、民族的地方的の宗教は、世界的發展をなすべき國民に取り甚だしき障害となるであらう、一宗派に立籠る狹隘なるものも葬らるべきものである、世界的素質を有する宗教に非れば、最早や新興國民を動かす事が出來まい、從來敎會は恰も國家の奴婢の如く其頤使する處となつてゐた。現代敎會は民族を生かさん爲に民族的色彩より超越せねばならない。

●●● 道德も亦世界的開展をなさねばならない。宇宙間に唯一の道德的中心たる神（ウ
キルソンの言）あるを信じ、世界的道念の上に立つて始めて、來るべき時代に活
躍する事が出来る、之を民族的の型の中に容れんとするが如きは、道德の權威を失
墜する所以である。

新時代に於ては何者も地方的階級的の專制を許されない、思想上の民主主義は何
物にも影響して其核心をなすであらう、世は爰に覺醒して舊套を脱がなければなら
ない、今日迄人類は、餘りに地方的の小さい動機に動いてゐた、今や世界的協同
生活をなすに及んで、爰に一飛躍を試むべきである、國家主義も可なり、それが形式
に流れ、愛國の假面を被り、國民的自負心に陥り、國家の將來を誤らざる限りに於
て……、されど全人類の爲に人道の存するを忘れてはならない、宗派主義も亦よ
いであらう、それが宗派の爲に宗派を説き、生命なき教理を弄せざる限りに於て……
……、されど宗派の上に人道の大義ある事を記憶せねばならぬ、宗教も道德も今

日迄皆他の爲に利用されてゐた、之を悪用して其野心を満さんとする者さへ生じ
た、然れども最早や地上に於ては如何なる國家民族も、世界の權勢を獨占せんとす
る汎獨主義を眞似る事は許されない、アングロサクソンもチュートンもスラブも、神の
全人類に與へ給ふた此世界を、民族化して獨占する權能はない、人類は爰に神意を學
んで自負的迷妄より醒めかけてゐる。

更に新時代は平和主義の確立せらるべき時代である、大戦終局の目標は恒久の平
和に在る、少くとも近き將來に於て戦争の慘禍を再びせざらん事を、主要の研究題
目とするであらう、單に戦前の状態に恢復するといふが如きは無理想の甚だしきも
のである、必ず爰に新らしき生産がなければならぬ、華府會議に依る軍備制限の如
きは勿論の事ながら、更に進んで國際平和軍の組織の許に、萬國軍備撤廢を執行す
る程の理想があつて欲しい、世は軍國主義の禍を泌々と感じてきた。

大戦の如きは毒を制するに毒を以てした迄の事である、平和の時代に於て依然軍

國思想の痕跡を止むるが如きは、世界の思潮に逆行する所以である、今後斯かる國があるならば、世界の誼を受けて自滅せねばならない、事實上此大戦亂を惹起した諸民族は、軍國主義の爲に自殺したものである、レイス、スチサイドは世界大戦の戦績に於て顯著である、如何に常備軍を擴張するとも世界の大思潮を抑制する事は出来ない、同胞將來の發展を望む者は這般の時勢を解する見識がなければならぬ、平和主義の如きは従來理想家の夢、宗教家の囁語のやうに見做されてゐた、外交は所詮武力の後援に俟ち、國際間の裁判の如きは机上の空論に過ぎないといはれてゐた、今や世界思潮は確かに一變した、國際聯盟や平和同盟や經濟同盟や、さては萬國々會開設迄も之を翹望するのが時代の叫びである、世は理想に動いてきた、全世界を動かす之を指導するものは、技術や方法にあらずして、其世界的理想である。一國民族と雖も最早や高遠なる理想を以てするに非れば、之が統一指導をなす能はざる程に人心の進歩を示してゐる、空漠たる理想であつた平和主義は今や強烈なる主張となつてきた。

而して新時代は漸く人道の發揮せらるべき時代である、今に至る迄人道の理想はあつたが人の世に於ては物欲や野心の爲に屢々遮蔽されてゐた、非人道の禍源たる軍國思想の破産と共に人道の光は輝かねばならない、新時代の一條件は此主義に依つて須らく人種的偏見や抑壓を一掃し去るべき事である。世界諸民族の將來を思ひ之が民族自決権を承認して各々其處を見出さしむるは、世界の指導者が抱くべき理想である、有色人種も亦従來の壓迫を免れて、世界に手足を伸ばす自由を附與されなければならぬ。

要之新時代は自由と平等と平和との理想を以て、織り成された理想郷の實現せる時代でなければならぬ、人類あつて以來朧るげながらに夢想しつつあつたユートピアは、基督教の神國の理想に於て明確に表示せられた、現代教會は之が實現の爲に特殊の特権を有し、責任を與へられてゐる。

(二) 新時代の豫言者

新時代のプログラムを一瞥すれば、それは徹頭徹尾基督教的理想による世界である事を否む事は出来ない、世界は此一轉機に於て依然として蠻界を脱せぬ戦前の状態に逆轉するか、或は爰に一飛躍をなして基督の理想を受納るゝかの分岐點に立つてゐる、而も戦亂の經驗よりして、世は既に從來の生活の不安を感じてきた、何者も人類の生命財産を安固にし、其幸福を保障するものはない、唯基督教の理想のみ人類唯一の隠れ家である事を解してきた。

世の進歩と共に宗教は權威を失墜し、迷信として擯斥されるに至らんとは、此頃迄所謂識者の口にする處であつた、而も今にして始めて世は其愚を笑ふ事が出来る。

舊時代に於て民心を指導すべき豫言者の取扱を受けしものは宗教ではなかつ

た。禍の源は爰に存したのである。

第一に世は科學を豫言者と認め、世を救済する力と認め、ハクスレーよりヘツケルに至る迄、科學萬能の豫言者は人心に權威を有した。過半世紀程科學思想の進歩したる時代はない、而も人類の道義心は夫に由て幾何の進歩をなしたのであらうか。

第二に教育と修養とは人心を導く豫言者であつた。教育を興へ美德の慕ふべく、無私の愛すべく、仁義の賢き事を知らしめ、文藝、哲學に由つて人心を養ふ時は、人類は理想の社會を形成するであらうと期待されてゐた、過去半世紀間ほど教育の進歩したる時代はない、而して教養ある人々が相倚つて此人類文化の大腐敗を醸成した。知識は人類の罪を制する力ではなかつた。

第三には權勢による統一が理想の豫言者と認められた。人の僕となるが如きは弱者の道德である。超人の權勢を以て飽迄能率を發揮したる偉人となり、何等の手

段を以てするも選民たるの使命の爲に世を統一するといふ、は一世の耳目を聳動するに足る一勢力であつた、此思想の権化はカイザルであつたが、其與黨は軍門のみならず事業界にも教育界にも甚だ多かつた。而して遺憾なく人類の大禍亂を生み出した。

第四は社會制度の改善を叫ぶ聲であつた。社會改良家は今に至る迄民衆に推服された豫言者であつた、曰く勞働問題の解決、曰く婦人參政權の附與、曰く衛生問題の改善等、其主張は幾多の歸依者を起した。而もそは寧ろ國際間の争鬭を惹起する原動力となつた。獨佛の社會主義者は互に主義の爲に忠ならん事を誓つて、而もいち早く干戈を執つて相見えたと傳へられてゐる。世界は斯かる改良家に由つて聊かも革新せられなかつた。

キリストの四福音に代ふるに上述の四福音を以てし、之を以て世を救ひ、人類を救済せんとした過去の豫言者は、淺見も亦甚だしいと謂はねばならない。哲學は必ずしも神を示さない。そは救を齎らし得なかつた。科學は罪を贖はない、そは人類を天國に導かなかつた、否々神なきの哲學は世界を血河屍山の巷と化せしめ、神なきの科學は人類界を地獄の修羅場と化した。噫!! 人類を永遠に祝福するものは抑も何であらうか。

新時代の豫言者は、從來文明人と稱する者の間に、稍々發揮されたる道念を、國際間に應用せしめねばならない。世の禍根は爰に存した。個人の惡徳となつた處のものも、強國の手によつて行はるゝ時に、そは光榮ある事業と稱せられた。個人間の道徳と國際間の道義とは著るしい矛盾を來した。個人としての紳士も民族の一員として直に蠻人となる、斯くて國際倫理は未だ蠻界を去る事遠からざるものがあつた、個人に教へられた十戒も國際間には無力であつた。盜む勿れ、殺す勿れ、貪る勿れ、欺き取る勿れ」の如き教訓は如何に國際間に實行されて居るであらうか、既に世界の共同生活をなすべき準備的訓練を受け、萬事が世界的に動くに至つた今

に於ても、尙之は將來のある大問題たるを失はない、今後人類は當然國際倫理の發揮を期せねばならない。而して之は從來の哲學と科學との爲し得ざりし事業である。又從來の宗教の敢て觸れ得ざりし問題である。現代教會は國際間の理解と協同との爲に其指導を企てねばならない。

(ホ) 新時代と教會

世は平和の確立と共に漸々新時代に入らんとしてゐる、此世界の一大變革期に於て基督教會は其使命の爲に蹶起せねばならない。由來基督教會の使命は常に當代に先行して、其思潮を指導する豫言者の任を果すことに在つた。宗教が常に未だ達成し得ざる理想をもたないならば、それは全く使命を失墜し終るのみである、基督教會はその多年主張し來つた人類同胞主義と平和主義とを實際社會に實現して、理想の靈的、神國建設をなすべき恰好の時機を與へられてゐる。今にして起たずんば何れの時代に

於てかその使命を果し得べき。

基督教會の講壇は爰に權威を發揮せねばならぬ。此思想に依つて養はれたる者に非れば眞に能く時勢を解し、國民の指導をなすべき見識を開發し得ざるものがある。之れ刻下我邦に於ても民心の統一に悩む所以である。

此時に於て講壇が單に巷説の反覆に止まり、或は民衆の輿論以上に出でず、或は新聞雑誌の情調を繰返し、政治教育に没交渉であり、保守退嬰の色調を脱する能はずんば、最早や新時代に對する其使命はないと謂はねばならぬ。

されど今や基督教會の眼前には目覺ましい挑戦が認められる、リンチ博士の「挑戦」なる一書は、基督教會が新らしい世界の制度に對する使命を高調してゐる、而して今や基督教會は、使徒時代以後未だ曾て經驗せざりし最高の指導能力を、發揮し得べき時機に置かれてあるとを叫んでゐる。

英國青年會に於て米國のモット博士に匹儔すべきヘンリー・ホジキン氏はいふ、

「戦争終結の曉吾等は教會が其正當の地位に立ち、豫言者の熱誠を以て活ける使命を傳へん事を望む」と。ジェフワートン博士は叫ばれたといふ。「吾人は新時代のスレツシヨールド(閩)に立つてゐる、或民族が之を指導せねばならない。(而して彼は米國が其責任者であると自認してゐる)若し一民族が指導するとするも基督教が其途を示さねばならない、若し基督教が爾かするならば、講壇が進歩の調を響かせねばならない。總ての民族が同様に歩調を揃へて進む事は望まれない。總ての教派教會が肩を並べて進まん事を望むは愚である。總ての牧師が悉く同意せん事を望むは不條理である。或者が必ず他に先行せねばならない」と。

現代教會は今や覺醒したる信念を以て、一大挑戦を試むべきの時である、機運は既に到來してゐる、世をして、戦前の無理想の状態に陥らしむる如きは人類史上の一、大耻辱である、血肉の戦を終つて新たに靈界の挑戦は開始せられた、國民生活に對してもその健全を保障すべき基督教の眞理を呼號せねばならぬ。之に於て吾等は現

代教會の蹶起を促さざるを得ない。

初代教會は「智慧ある者多からず力ある者多からず」僅に百餘名の小團であつても、彼等は當代に於ける羅馬の文化と猶太の宗教の間に介在し、妥協や讓歩を敢てせずして使命の爲に健闘した、そは一足飛びに猶太教と分離した、そは努めて當代の倫理と袂を分つた、そは絶對的に羅馬の文化と絶縁した、そは斷乎として希臘哲學の思潮に拮抗した、斯て彼等は一般民衆の倫理と理想とに超越してゐた、その愛翫するものは市井のそれとは異つて居た、復讐主義を信ぜる世界に於て彼等は愛を説教した、享樂主義に浸潤せる社會に於て彼等は義務と貞潔とを勧めた、權勢の基礎に樹立された文化の中に在つて彼等はグロドウキル(好意)を主張した、封建制度の下に在つて彼等は人權の平等を叫んだ、官僚主義の裡に在つて彼等は民主主義を述べた、帝國主義以上に何者もなき處に於て彼等は人道を高調した、現代教會の要するものも亦、當代と隔絶せる理想に向つて飽迄挑戦せんとする信仰の勇氣では

あるまいか。近代に於て各國の基督教會は皆其の國家に隸屬した、而して新約の教を棄て舊約の教を實行するに満足し、民族的に捏造して大眞理を枉げ、戰爭を謳歌し惡徳を稱賛してゐた、國際的倫理の大矛盾に對しては何等の挑戦をも試みた事になかつた、人類同胞の大義を説きつゝもそは血に渴ける戰爭熱を煽動するやうな矛盾を敢てしてゐた。總てに超然たるべき宗教本來の豫言的使命を全く没却してゐた。之とても戰時に於ては諒とすべき點もあらう、されど今や其信仰の良心に立ち戻り、新理想と制度との實現の爲に、滿腔の興味と同情と努力とを傾注すべきの時とはなつた。人類永遠の祝福の爲には國際道德の改善を促し、恒久の平和を樹立し、萬國軍備撤廢を主張し、國際聯盟を成立せしめ、萬國々會の開設を促し、國際裁判制の權威を發揮せしめ、事實上基督の理想が國際制度上に權威を有せしむるに至らねばならない、個人の救主たりし基督をして國際上の救主たらしむる迄は教會の使命は果されぬ、基督教の理想は至ふせられない、天國の建設は爰に在る。

世界を從來の倫理的矛盾より救済する事は、現代教會の新時代に對する使命である、基督教は由來此倫理的大理想を有せるが故に、世界民心に權威を有し、インスピレーションを與へて來た。

此人類の爲の精神的權威を繼承し、之を發揮すべきは當に現代基督教會の一大事業である、世界改造の先驅者たり、其權威ある指導者たる靈活の基督は、教會の首であり、教會は其體であるとは屢々稱へらるゝ處である、人類救済の使命を果さんが爲に、吾等は教會なる根據地又は城砦に據るを要する、更に譬へば教會は救の船である、順風にも逆風にも之を善用して、此救の船は航海を續けてゐる、此福音號の船腹は甚だ少ない、炭水の供給する時には窮乏を告げる、而もそは能く幾多の短艇を卸して溺れ行く者を救ふてゐる、國家の要するものは、人命を破棄する怒級戰艦よりも、寧ろ此福音の救助船である、應て平和と共に人格的競争の時代が來る、國民の安泰と誇とは何よりも先づ、天地の神を信じ、人道の大義に立ち、品性の廉潔を示

し、人類社會の奉仕を敢てする人格に由つて保障せらるゝ、嗚呼吾等如何ぞ此國民精神の危機を坐視する事が出来やう、『機を得るも得ざるも勵みて御言を宣傳』するは現代教會の繼承し來つた永久的使命である。

(へ) 新時代の挑戦

新時代に於ける我が精神界は基督教に取り果して時の利を得せしむるや否や、未だ素より急に判断し難いものがある、順風か、逆風か、雨か霰か、天の彼方に見えそめた掌ほどの雲は何に變るか、カルメルの山頂に鼓動を昂めた古への豫言者と同じく、吾等の胸を躍らすものがある、高く空を仰げば世界的順風が軟かに動いてゐるが、俯して地上を見れば、烏國的の低氣壓が今も尙低迷去り難くして、朔風の吹き荒む感がある、此二つの相錯綜せる氣流の中に漂ふて、基督の救の船は其針路を進むのである。

精神界の思潮如何に係らず、我が國民の要するものは基督教の外にはない、傳道は同胞救済の緊要な道である、時を得るも時を得ざるも勵みて之を努めなければならぬ、而も世界的氣流は一面其時の利を示してゐる、或は其反動も起るであらう、基督者は此一面に得たる時機を逸すべきではない、時機を得ざるも尙勵むべき傳道は、時機を得て之を閑却するを許されない。

基督教の根本義は、現代日本の要する思想上の大綱である、他の何の教も之を國民に提供すべき權威あるものはない。爰に新時代の爲め一の靈的挑戦が現代教會の上に通つてきてゐる。

大戦亂は終熄した、けれども更に永久的の靈戰は愈々開かれんとしてゐる、世をして今一層基督の勝利を感じしむる迄は、神の國の建設を全ふし得ないからである。先づ第一に基督の教理を徹底せしめねばならない、『人の行動は其信念の如く、人の行爲は其教理の如し』といはれる、人の有する、教理、信條、哲學、理想なるも

のが、全く其生活を支配する、世界戦中獨逸の牧師は山上の垂訓を讀まない、英國自由教會も同じ傾向であつたといふ、其説く處の神は基督の父ではない、舊約にある萬軍のエホバであつた、カイザルは戦前二年より諸種の演説に『我等の頼るべき神と劍』といふ語を用ゐてゐた、斯かる教理が大戦亂を孕んだのである、トルストイは露西亞教會の神は軍服を纏へる將軍の如きものであるといひ、日露戦争の當時には其司祭が山上の垂訓殊に『汝の敵を愛せよ』と聖書を朗讀し、之を閉ぢて祈る時に『神よ願くは日本人を地獄に陥れ給へ』といふ者さへあつたと傳ふ、武装的平和といふ矛盾は其教理の不徹底より來るものである。

第二に、教理は今や新らしい光明に照して解釋せらるべきである、救濟觀の如きも倫理的社會的色彩を採らねばならぬ、救はれたと稱へて社會より指彈さるゝが如きは教理の誤解である、救とは團體の間に其位地を發見せしむる事である、何となれば自己の充足は社會的生活を全ふし、之に忠實なるに於て始めて得らるゝからであ

る、而して救濟の眞意は自己充足の外にはない。

贖罪觀も亦新たにせねばならない、不義不正より立戻つたといふ自己の權利名譽の恢復は、未だ贖罪の反面に過ぎない、斯かる贖罪は基督者ならずとも之を有してゐる、自己防衛の主張は法律濫用を企つる者にも出来る、世は權利を主張するに急にして義務を感ずる事が甚だ鈍い、何故一進歩をなして他人の權利の爲に努むる社會的、倫理的意義を考へられないであらうか、基督の教は徹頭徹尾義務と奉仕と献身とである、『各々己が事のみを顧みず人の事をも顧みよ』とパウロもいふた、贖はれたる基督者とは、世の罪の爲に贖の犠牲となつた基督と共に、斯かる社會的奉仕をなす人の謂である、自己中心の救を要求する者は基督の贖に參與せる者ではない。斯く教理の徹底を圖り、教理の新らしい解釋の爲に戦ふ處に、新らしい時代の靈戰がある、此戰には鋼鐵の武器の代りに神の武器を要する、敵愾心の代りに最大の武器たる愛を要する、人を殺す爲の戦でなくして人を救ふ爲の戦である、秩序を

擾亂する戦でなくして秩序を全ふする戦である、此戦には常備軍を要せぬ、併し基督の精兵を要する、之には砲兵工廠を要せぬ、けれども基督教會あるを要する、平和の時代に於て愈々舊思想に向ひ此挑戦を企てなければならぬ、之れ現代教會の經驗すべき一挑戦である。

而して國民は今や基督教會に向つて一の挑戦を爲してゐる、靈戰の部署成り、愛の戦備を整へ、此挑戦に應じ得る準備の定まれる教會は何處に在るであらうか。

其戦備に關する各方面の事項は、先づ現代教會の内部改造に在るが故に、後章順を逐ふて之を述ぶる事とし、今は現代教會が現代人をして獲得せしむべき、眞理の要項を爰に掲げやう、之等は教會が從來稱道しつゝあつた處ではあるが、新時代に向ふに方つては、更に我國民の間に高調されねばならぬ綱目である。

一、神の正義と仁愛、之れ宗教の始であり終である、天地宇宙に正義仁愛の根源たるべき生命の、嚴然として存在し給ふを信ずる信念を缺如しては、到底大國民の教養

を望む事が出来ない、神の教に根柢を有せぬ倫理道德が、形式虚禮に流れて生命なきは素より其故であり、人心の荒むも亦己を得ない、國民思想の根柢に神を提供せずしては此國を救ふ事が出来ない。

國民は其宗教の如くに改造せられる、一國民の神觀は直に其民心を示すものである、今にして健全なる神觀が我國民の精神に確立するなくんば、如何にして國家社會民心の安定を保障せられやう。

今日に至るまで間然する處なき儒教の道德を以て養はれた國民が、更に其實行能力を缺けるは抑も何が爲であらうか、之には種々なる事由も數へられやう、けれどもそが宗教心を等閑に附した事が最大の原因である、之を心理的にいへば、原理原則を學ぶ事が直に生命とはならない、宗教による教育のみが正義仁愛の人格神に對して責任を感ずるやうに、道德的生命を興へ得るものである、國民に此教養の原動力を提供するは、改造されたる教會の事業でなければならぬ。

二、人類奉仕の理想 之れ基督の十字架に表現したる基督教の根本精神である、而して新時代の理想は即ち奉仕といふ一語に總括せられ得る、如何に多く社會政策の論ぜらるゝ事ありとも、十字架に表現せる此精神に觸れずしては、到底社會を善導する能力がない、假令百の方法を講ずるとも、千の方策を廻らすとも、結局民心の中樞に此精神を銘刻する迄は、健全なる社會の實現を望む事が出来ない。

社會の組織制度に關する改造の叫聲は、今や世界の隅々にまでも響き渡り、之に應ずる反響も亦相當に見出される、我邦に於ても社會事業や社會奉仕は寧ろ一種の新しき流行の如くにもてはやされて來た、けれども宗教的精神を缺ける處に、如何に其組織制度が齎せられても結局形骸を止むるに過ぎない、否斯かる場合には却つて美名に騙かれ易きが爲、に社會の病弊を醸成する事も亦決して尠なくないであらう、繪を描いて眼を入るゝもの、佛造つて魂を入るゝものは、之に生命づける宗教的理想である、古い基督教の一部には社會的慈善的の事業を經營する事が其功德の爲

に必要と考へられたり、富豪の遊戯の如くに貧者弱者を賑はす習もあつた、けれども改造せられたる現代教會は、其直接事業に當らんよりは寧ろ之に生命を與へ理想を提示すべき指導能力を發揮すべきである、後章更に此點に關して詳述するであらう。

三、人格の價値と貞操 人格を方便視したる物的文明の餘弊を一掃し、男女共に貞操の保護を要求する事を得るものは、現代に於て獨り基督教の存するのみである、基督教が此權威を以て亂倫の淵に陥らんとする我國民を救ふに非れば、國民救済の道は何處にも之を見出す事が出来ない、天下滔々として貞操の破滅を憂ふる今の時吾等は此特有の眞理を呼號せねばならない。

今や古い道徳は悉く其權威を失墜してきた、新時代の子は其古い革裏の中に容るゝには餘りに醜醜の活力が強過ぎるのである、而して一切の規程が破られ人心の抑へが取去られて、自由解放を得たと喜ぶ現代青年は、思ひ切つて其慾望の翼を擴げて淫奔放縱にさへ走りつゝある、爰に自由慈愛の思想が美しい艶麗な姿を表はし

て、愛を生命とする性的生活の福音を説く、一たまりもなく皆之に魅せられて往く時に、遂には騎虎の勢、倫理も道徳もなく唯亂倫に落ちて往く、それが自由慈愛の美しい姿の中に隠し持つたる最後の毒牙に罹つた者である。

人格の價値と其尊嚴とを充分に意識せしめられない國民が、斯かる思潮に乗出づる時、幾何の危険が横はるであらうか、遂には夫婦の倫もなく結婚の制度も破壊せられ、家庭は最早や存在の意義を失ひ、無節操の亂調を來すであらう。

現代教會は此時代の病弊の救済の爲に最善の途を選ばなければならぬ、從來世は教會を目して男女交際の危険なる機關となし、教會は此誹謗を懼れて何等國民の性的教養に指導を與ふる考がなく、此問題を放擲してきた、けれども改造されたる教會は爰に相應の施設と用意とを費やすべきである。

四、人類同胞の大義 人種的の偏見や壓迫は今日迄洋の東西に行はれてゐた、或は現に行はれつゝある、後も尙行はるゝかも知れない、けれども今や世界人類は之を

脱却せんとして自ら大なる悶を感じてゐる、此努力に對し教會は同情と理解とを有たねばならぬ、教會は他に向つて要求する前に先づ自ら人種的の偏見を去るべきである、而して人類共通の大義に基づいて、始めて世界に對し公道によれる權威を保持する事が出来る、有色人種の救済の爲に、現代教會は世界の何人よりも先んじて、此人類同胞の大義を稱道し、以て我國民の救済を企つべきである。

四海同胞の語は曾て日本國民を意味した、今は之を以て稍々世界人類を意味する程に進んできた、國際生活が然らしめたものである、されど其眞意に至つては未だ國民の意識に上らない、之れ神を天父となし人類を神の子と做す信念を根底とせぬが爲である、人種平等は我が政治家の美はしい叫聲であつた、惜い哉其の背景として現代世界を動かしつゝある宗教的大信念を有たない爲に、甚だしく其の提案に權威を缺いた、此苦い經驗に徴しても、我が國民は、人類同胞の大義を宗教的に學ばねばならない。

抑も人種の異同は地理的歴史的環境の感化による皮相の差違に過ぎない、皮膚一枚の下には同じく赤い血汐が流れてゐる、されど黒人を見て我兄弟と感ずる心は宗教的信念を以て養はれずして出来るものではない、之は主として情操の問題である、理智の上から如何に肯定しても、感情の納得は信念に俟たねばならない、此素養を缺ける國民は人種差別撤廢を叫ぶ資格を自ら喪失してゐる、現代教會は從來の諸宗教が妥協的方便主義に低下して、此大義を没却し去りたる痛ましい跡に顧みて、他迄之を呼號して國民將來の福祉を保證せねばならぬ。

(ト) 新時代と國家

我が愛する國家をして、此世界の轉機に處し、誤りなき針路を取らしむるものは現代教會の民族に對する新使命である、既に世界の舞臺に立てる我が國が世界の思潮の趨勢に逆行する事は到底不可能である。此時に當り國家を誤るものは形式的保

守的の舊思想家である、我國將來の發展と保安の爲め、眞に衷心愛國の至情に滿てる基督者が、世界的見識に立つて同胞の誤たざる指導を企てなければならぬ。吾等を以てすれば其針路は明白である、我國も亦世界と共に、基督教主義を以て起つより外に道はない、從來の民族的地方的偏見を脱して、世界主義に立つに非れば向後の世界に權威を得る事は出来ない。殊に從來世界の有する疑惑の雲を一掃し人類的にも對等の權能を發揮し得べき唯一の道は、我國が一般に基督教國と認めらるゝ時の來るを待つより外はない。最近に至る迄其教育も政治も軍隊も、悉く獨逸主義に同情を有せるが如き我が民族の態度は、向後平和の時代に於ける活躍に少なからず支障を生ずべき幾多の疑惑を與へてきた、之は國家將來の爲に大に惜むべき保守的淺見の生んだ禍である。今にして翻然我國國民の態度を改め思想上の一革新をなして、新時代の基調たるべき基督教を受け納れ、其主義精神を以て世界の良心に訴へる事を努むるの外に、我が國を救ふ所以の道はない。基督教は眞に此民族

個人のみならず國家を救済する唯一の力である。此民族の間に於て先に選ばれたる基督者は、爰に其愛國的使命を果すべき當面の責任がある。基督教を除いては何物も我同胞の針路を導いて世界に活躍せしむる權威はあり得ない。

現代教會は其理想を掲げ其信念に據り、國家を超越したる見地に立つて、而も國家を窮地より救ふべき天よりの特權と使命とを持つてゐる、一國家の健全なる生命は其國民精神の内容の培養と充實とに俟たねばならぬ、忠君愛國は形式や制度ではない、忠孝の倫理的徳目が如何に羅列されても、民心の内容に其培養を缺いては所詮國家的生命を發揮する事が出来ない、現代の大なる憂は爰に横はる、家族制度は法規の上に於て完備されても現代青年男女の家庭生活に實行せられない、之れ民心の愛を養ふ源泉が枯渇してゐるからである、故に多く道徳を説かれて愈々之に反せんとする、國民は忠孝を制度や方式に當拵めて其活力を表はすべき愛の内容を缺いてゐる。之れ長く形式制度に依つてのみ宗教心が幽閉せられて、生命なき空文の徳

目が諳んぜられてきた宿弊である。

現代教會は此國民的の最大缺陷に對して、其内容を與ふべき特殊の使命と特權とを有してゐる、而も徒らに教理や制度に執着して、時には宗教制度をさへ無視し超越したる基督の、活ける精神を経験せないならば、同じく國體擁護の空言を弄して其實際に於て殆んど事毎に之に悖る既成宗教の如く、固形するであらう、主義と信念とに飽迄忠實に突進せよ、それが國家社會の爲になる唯一の途であると現代の救主は叫ばるゝであらう。

(壬) 新時代と新人

嗚呼偉大なる人格者たるの如何に難事なる！天下見渡す限り一のロイド、ジョーヂなく一のウキルソンを見出し得ないではないか、昔時希臘の聖哲は白晝提燈を點じて市中を徘徊し、衆人嘲笑の裡に眞人間を深したいといふ、豊公の間に答へて黒田

如水は天下最も多き、而して最も少なきは人間なりといふたと傳ふ、何が故に爾か
く人たる事の困難なる!!

人格は教養に由つて擴大し成育すべき一の生命である、世界的思想を以て養はずして世界的人格を望むは素より木に攀つて魚を求むるの類である、宗教的信念を閑却し來りし孔孟の教、道義とは單なる對人關係に過ぎぬ處には道德的信念も亦起り來らぬ、由來權勢に結んで其生命を維持せんとし、却つて之を失墜せる佛敎に由り果して如何なる人格が生産せられやう、之等二要素の相結べる武士道には美はしい花も咲いたであらう、されど所詮封建的様式たるを免れない、最早新時代の趨勢と共に存すべき餘命はない、期くて養ひ來りしものは島國的根性である、大國民たるの襟度を養ひ得ざるは素より其所である。

パウロは「喜ぶ者と共に欣び悲しむ者と共に悲しめ」と同情の極致を教へた、悲しむ者に對する同情は萬人之を有する、されど得意なる者と共に喜ぶ美はしき心は未

だ開發せられない。依頼心と嫉妬心と猜疑心とは由來國民の根に卷ついた性質であらうか、成功者は悉く之を誣ひ、名を成し富を得る者は悉く之を冷評し、上らんとする者は極方之を引下げんとするのが今の世の有様である。「睦まじき仲もこのごろうとくし隣りに庫を建て、からのち」といふのは人情の弱點であるが、更に甚だしきは隣りの倉庫に火の手の上るのを拍手して眺める者さへある。人の徳を建つる事の出來ない偏狭な心、江戸の敵を長崎で打つ復讐主義の舊思想を以て、大國民とならんとするは、根抵より誤つてゐる。山上の垂訓は現代教會が國民の視聽の前に高調すべきものである。

世界の趨勢は同盟である、統一である、協力である、そして分争背徳、友を售り約を破り人を陥れ私利を貪る、偏狭陋劣なる心事を以ては、到底世界の民と共に歩調を描へて進む事が出來ない。

人の徳を建て得ぬ者は亦自己の徳を保ち得ない者である、不幸なる富貴の人、誰

一人彼の爲に教ふる者もなく、悉く其鬚の塵を掃ふ阿諛者をのみ近づけ、其地位の高まり富の加はると共に、自ら人を眼下に見るに至る、斯くて謙讓の徳を失ひ不遜倨傲また神恩を思はず、人の同情を顧みざる者が多い、噫憐むべき貴人よ、汝の重んぜらるゝは汝に非ずして、汝の地位であり富であり權勢であることを解せざるか、一朝それ等が汝の身を去るの時果して幾人か汝の爲に同憂の友として残であらうか、富貴に居つて貧賤を忘れぬ美德を棄つるやうな者は、到底新時代の人ではない。現代教會は常に之を戒めて民心の低下を豫防せねばならぬ。

人間の社會は相互關係より成立してゐる、人の名譽も地位も富も皆幾多の人々が支持するによつて之を保つことが出来る、恰も議員の選舉區民に於けるが如きものである、人は其社會的恩恵を覺えて社會に奉仕すべき責任がある、而るを贏ち得たる地位と權勢とを私利の爲にするが如きは、思はざるの甚だしき者である、之を稱して不徳といふ。

良人たる者よ、汝の現在の幸福は汝の腕に由つてのみ得られたものではない、見えざる處に妻女の熱き涙の祈が籠つてゐる、然るを業成つては弊履の如くに糟糠の妻を棄つるか或は家を外にして敢て顧みざるは何事であらうか。

妻たる者よ、汝が家庭生活に於ける今日の幸福は、汝の竦腕や容色に由つてのみ得られたものではない、如何に良人は外に在つて妻女の知らぬ苦辛や困難を経験するかを思へ、然るを家に閑居して敢て奢侈に耽り、心血を絞リし勤勞の價を濫費するは底事であらうか。

子女たる者よ、汝等が給せらるゝ衣食や學資には、兩親の高價なる犠牲が籠つてゐる、而るを何ぞ學資の豊富なるを誇るか、何故そを贅物の爲に費やすか、恩を解せざる者は自ら禽獸に伍する者である。「富の増し加はる時は之に心をとむる勿れ」とは詩篇の誡めであるが、富に呑まれたる者は金錢の奴隸となる、蓋し之を支配すべき人格者とはなり得ないであらう、忘るべからざるは世の恩である。感恩の心薄ら

ぎつゝある現代に於て、此美はしき徳を新らしい形に於て恢復せしむべきは、現代教會の倫理的使命の一つである、何となれば之は基督教の信念に基づかずしては所詮發揮し得られない情操に關聯してゐるからである。

『汝等は價をもて買はれたる者なり』とパウロはいふた、吾等の今日ある爲には幾多の高き價が拂はれてゐる、況んや罪の奴隸たりし者が救を味はんが爲には、基督の高價なる犠牲の血を拂はれてゐる。

此信念に立たずしては徹底したる教養を望む事が出来ない、人の徳を建て自分の徳を修めて始めて一個の人格たるを得る、新時代に要する者は斯かる人格である、島國根性を以て固まり、偏狭なる地方的感情に囚はれたる者は、最早や舊時代の遺物として葬り去られなければならない、「天の父の完全なるが如く汝等も全くすべし」とは大國民の教養上最高の目標である。

既に先入の偏見を有し、既に心情に疵を負ひ、既に舊弊の習性を得たる成人とし

て、誰か向上の惱なかるべき、此苦き經驗に顧みて、吾等は未だ世の穢に染まざるに先だち、生れ乍らの基督者を造り、自ら世界的教養ある人格を生み出す事の最大事業たるを思はねばならぬ、現代教會の宗教々育は我が國民教養上の缺陷を補ふべき緊要の大事業である。

將來の大人格は搖籃の中に在る、人道の光は少年期より照り出で、新らしい理想は青年の中より發揮せられる、新時代を擔ふべき新人は今の時より養はなければならぬ。人格創造の力を持てる基督により新たに生れたる神の子の姿を發揮する處に、新時代を擔ふべき新人がある、「人もし基督に在る時は新に造られたる者なり、古きは去りて皆新らしくなるなり」、事實人格の改造が行はれねば新時代は全ふせられない。

二、現代教會の革新

教會は常に永久の使命を、目標として掲げてゐる。されど各時代に適應せんが爲には、特に現代に於ける新使命を自覺せねばならぬ。今や世は混亂の巷に陥つた。而して適歸する處を知らずして悶えてゐる。懷疑の幽谷から、聽て希望の曙光を仰がんとしてゐる。神聖なる惱を感ずる時代は、同時に宗教的の時代である。新らしい組織制度を要請してゐる改造の時代は、神の聲の聽かるべき時である。現代教會に對する道義的挑戦は、顯著なるものがある。未曾有の機會は、基督教會に與へられてゐる。正しい刺戟は直に世を前進せしめ、新らしい覺悟は定められ、新たなる選擇は行はれ、新理想は建設せられ、新時代は齎せられる。教會の努力に對して世は囑望し、期待し、且呼應せんとしてゐる。現代教會の新事業は、實に壯大なるものがある。苟も高尚なる奉仕の目的に生くる眞の男女に取つて、それは強き牽引力を

有する。

(イ) 教會の時代的革新

されど教會が此重大なる使命に應へんとせば、爰に新時代に順應せる教會自身の改造を要する。教會の永遠に亘る靈的的使命は、新らしい産業時代に適せる、新しい衣裳を纏はねばならない。今も尙中世紀の隱遁的消極主義が教會の内に陰然其勢力を有して、教會をして山寺たらしめんとする傾向がある。社會的福音は、教會の俗化と見做さるゝ偏見も多い、勿論基督の神の國は「此世よりのものならず」と示されてある。されど「我願ふは彼等を世より取給へとにあらず」と明言された彼は、現代社會と隔離せる一社會を形成して、信仰の潔さを樂む如き態度を好み給はぬであらう。神國の理想は、此世を轉化せんとする抱負にある。此社會的意識が、まだ充分に基督者に依つて發揮されない。爰に神國建設の事業が二

千年來の努力あるに係らず、思はしき進歩を見ずして、世は依然蠻界を距ること遠からぬ現狀に止まる所以である。一個人としての基督者を生むに成功したる教會は、其理想を社會に實現せしめ、之を國際間に適應せしむる事には失敗してゐる。此儘の趨勢を以て推移すれば、神國實現の望は達せらるべくもあらぬ。從來の教會が重きを置くべき點を誤り、遂に此缺陷を生じた。世界大戰は教會に此事實の皮肉を見せつけたものである。

基督は常に進歩主義に立たれた。新時代の子を古い革囊に納れ、新しい布を古い衣に縫合するの愚を指摘せられた。其聖書に關する見解に於ても、當代に適用せん爲には、古への人に説かれた教訓に對し、常に「されど我は汝等に告ぐ」と、新しい見識を提示せられた。現代教會が徒らに字義的に初代教會の見解を踏襲し、其教義の糟粕を嘗めつゝある間は、到底時代の要求に應じて神國建設の永久的使命を果たす事は出来ない。

人動もすれば現代の多數民衆を率ゐんが爲に、其好む處に適從するを以て時代の要求に應ずる所以と解する。されどそは大なる誤である。天下は常に低級の理想、劣等の生活に甘んずる者が多數を占てゐる。輿論は屢々天下の愚論である。之に追從する者は所謂世の權勢に壓倒されて、所詮地の鹽、世の光たる事は出来ない。若し多數を網羅するといふならば、世界到る處迷信の如くに勢力を有するものはなす。エディ夫人やおみき老婆の福音は、寧ろ反響が廣く大きい有様である。それが爲に基督の眞理を迷信化せんとするが如きは、基督の敵である。吾等が時代的要求と稱する所以のものは、畢竟神國の理想より看取したる時代の缺陷であつて、世が之を自覺すると否とは第二の問題である。

而して又基督教會には二千年來の傳説がある、否アブラハム以來の遺産がある、其會では生命ありし樹木も、今は既に化石となれる如く、固形態となつた眞理の衣裳もある、之を基督の中心生命と誤つて變態的基督教を説く者も尠くはない。

教會の有する文獻は猶太民族のものである、此所謂選民の間に時代的民族的衣裳に包まれて、基督の世界的生命が不斷に展開されてきた、而も未だ其猶太臭味を離脱する事は容易でない、況んや殊に黙示文學を以て天下永遠の眞理と解したり、奇蹟や傳説を以て基督教の純福音と爲すが如き逆轉を示す者あるに於てをや、斯くて基督の眞の精神は誤られて、基督教の名を冠せる猶太教や天理教、將た大本教式の末派が生ずる、基督の眞意が斯く迷妄の雲に蔽はるゝは、吾等の到底忍ぶべからざる所である、現代教會の一使命は基督教に纏綿し來る總ての迷信を打破せん事である。此點に關しては更に次の章に於て詳論するであらう。

(ロ) 福音の社會化

所謂社會的福音を如何に解するか。幾多の誤解が此間に抱擁されてゐる。或者は教會が慈善事業をなすもの、如くに思ふ。されど社會的福音なるものは、直に慈善

ではない。慈善も亦中世から行はれ來つたものであるが、慈善事業を以て神國の建設は望まれない。或は又社會事業を經營する事と解する向もある。されど社會的福音は、直に社會事業ではない。近來インスチチュショナル、チャーチの理想が發達してきて、教會が其色彩を帯ぶるに至つたのは好ましい事である。されどそれは社會的福音の唯一部の表現に過ぎない。基督の見識は、常に此點に關して徹底的であつた。斯かる表面の問題に拘泥しては居られなかつた。癩病者シモンの家に於て、高價なる香油を注がれし時、之を慈善に用ゐたならばといふ弟子に對して、「貧しき者は常に汝らと偕にをれど我は常に偕に居らず」と仰せられた。世には慈善よりも更に根本の問題がある。富める青年に對して、其全財産を售り貧者に施すべきを説かれたのも、慈善が其教訓の目的ではなかつた。神國の民は、社會公共の爲に奉仕すべき精神を第一要件とする、財産に執着する以外に何もものなき義人は、社會的存在として不具者たるを免れない、其神の國に入るは至難の事であると説かれたの

である。

舊新約を通じて説かれたる教の眞髓は常に社會的關係を有してゐた、モーセが同胞を埃及より救ひ出した事より、初代教會の共産主義を實施したる事まで、其成敗は兎も角として社會的理想に耀やいてゐた事を認めねばならぬ、而るに近代に至つて此理想を失墜し利己的個人主義に陥つたのである。

基督者にして他と協力協同をなし能はぬ者は、神國の民ではない。愛の紐、眞理の力を以て、總ての胸を縫合せる社會をさして神の國といふ。此徹底的教化なくば、生産機關を共有にするも私有にするも、資本と勢力とを如何に新らしい制度の下に置くも、結局不徹底である、現代教會の主張は唯物論に根ざした社會改造ではない、宗教的理想に立てる基督教社會の實現である。

(ハ) 社會主義と基督教

この區別は明かに認めねばならない。イエスの當時、天より火を呼び下して彼等を焼き盡さんかといふ過激の弟子も居つた。されどイエスの態度は、常に不得要領に見えた。稗麥も拔棄する事を制して、麥と共に兩ながら育て置けと教へられた。洗禮者ヨハネもイエスの態度には、嫌焉たらぬものがあつて、其弟子を遣はして質問せしめた。爾かく不徹底、不得要領に見えし處に、實は徹底せる見識が横はつて居る。慈善や矯風も生じたる結果を拭はんとする努力、或程度迄は常に其奮勵を要すれども、それは結局神國建設の根本方策ではない。總ての害悪や貧者弱者は、社會の病であるが、それは要するに人心より分泌したる産物に外ならぬ、之を拭拂するのみの業は、常に焼石に水である。之が病源を爰除せずしては神の國は實現されない。之れイエスが直往邁進、唯神の國なる社會的福音を高調された所以であつて、現代に於ても教會の爲す處、一面社會主義者には、不徹底に見ゆる事を免れないであらう。併し教會の使命は斯くて徹底的なるを自任せねばならぬ。されば社會的福音と

は、イエスの神國の理想を現代社會に實現せんとする方針である、何等新らしい、突飛な運動ではない。イスラエルの豫言者よりイエスを経て向上し來つた基督教の根本真理の鼓吹に外ならぬ。近代に至る迄基督教の根本真理が充分の展開を見ずして埋没されてゐた、由來宗教は個人の靈精問題のみを取扱ふものと解せられてきた、之れ前項に述べし如く、個人としての基督者は存するも神の國の實現を見難き所以である、而も實際に於て基督教的の社會なくしては眞個の基督者は存在し能はぬ、全家擧つて信仰に入る迄は一人の信徒も至き基督者の生活を送り得ない、社會が教化さるゝ迄は眞の基督者は事實存在し得ないのである。

而るに現代に於ては、尙基督者の多數が、信仰の個人的色彩以上に其見識を開發せられずして、唯徒らに神國實現の祈を繰返してゐる、視よ現代基督者が如何に不知不識の間に個人主義に傾けるかを、近代生活の特長であつて同時に缺陷たりし個人主義が、誤られて總ての思想を着色した。基督の宗教さへも尙個人の救済や福祉や完

成といふ高尚なれども、而も利己的の方面のみが高調されてきた、信ずる者には幾何の幸福があるといふ保障に釣られて信仰に入る底の者に過ぎなかつた、「十字架を負ふて我に従へ」との要求は其幾何が解せられたであらうか、福音の社會民衆化は、傳統的基督教改造の第一歩でなければならぬ。

(二) 教會の社會的革新

基督教は單に教會内部の活動に止らずして、教會が信徒の社會的活躍に對する原動力を與ふる機關である事を、今一層的確に意識せなければ、其社會的使命を果たす事は出來ない。教會は先づ其會員をして、基督の律法に従ひ、日常生活及び其事業に之を實現せしむる程に、内部の徹底せる教化を要する。大戦以來米國に於ても、傳道上内省的に傾いてきた。識者は基督教國の教化が、最大の急務である事を主張する。曰く基督教國が現在の有様であつて、如何にして吾

等は東洋の教養ある宗教の前に基督教を宣傳する事が出来やうかと。同様に現在の急務は、教會内の教化が先決問題である。爰に少數ながらも教會に重きをなす會員が教養されるれば、教會の社會的の信任と其位置とは高まつてくる。基督教者現在の社會に於て基督教の聖訓を實行せんとせば、多少の犠牲を拂はねばならぬ、次に教會は其區域を擴大して、教會外の基督教者を抱擁する事に努めねばならぬ。社會一般に基督教の聖訓を實行しつゝある者は多い。假令彼等は名に於て基督教者ならずとも教會は漸次之を包括する必要がある。

教會の態度に由つて、基督教は寧ろ教會外に出で去る傾向を生ずる。教會が單に其形骸をのみ抱く様になれば、基督教は極めて漠然たるものとなるであらう。現在に於てすら既に『無名の宗教』が、教會外に發展しつゝある。頑冥不移、新時代を指導する能力を發揮せざれば、教會は世に取り殘されたる廢趾となるであらう。されど教會自身が其使命を擴大して、常に神國の理想に立たば、それは基督教の生命を保

全する機關として、長く存立する事を得るであらう。

今日の社會運動に對しても亦、教會は其根本使命を保有して交渉する處がなければならぬ。組織されたる教會と労働組合とが、密接なる關係を有するやうに、其隔離の溝渠に架橋する事を考なければ、此方面の人々を包容する事が出来なくなるであらう。

斯くて現代教會は總ての社會運動に其生命を與へ、精神的内容を供給し、之を完成せしむべき新使命がある、神が人心に最高の權威を持ち給ふてふ信念を缺ける社會運動は、屢々矛盾撞着を生じ、神の父格を認めざる人類兄弟主義は、眞理の半面に過ぎない。教會は此の點に於て現代的思潮と其運動とを、指導すべき權威たらねばならぬ。

三、現代教會の使命

古き文化を誇りとし、長き傳統を樂しんで、相應に教養を積んできた東洋諸民族も、今や世界的環境に順應せんが爲め、根本的の教化を必要としてゐる。基督教の使命は爰に在る。東西文化の接觸融合は、基督者の人格を濫過して始めて其生命を發揮し得るからである。

獨り東洋のみならず、戦後の瘡痍尙未だ癒えぬ世界の民心は、根本的の教化を必要としてゐる。故大隈侯の如きは、夙に東西文明の融和を唱道せられたと同時に、戦後民心の指導に關しても、種々考慮を須ひられてゐた。之れは其青年時代に、フルベツキ氏に依つて基督教を學ばれた事が、大なる動機をなして居るのであらう。余は先年外遊發程の前日、親しく老侯と思想界の趨勢に就て會談した。其當時の印象は今も尙鮮かに我心に残つてゐる。追に進歩主義に立ち、老境に達して尙よく現

代思潮を解し、民心指導の見識を有せる政治家と思はれた。

其時老侯はいはれた。

今や世界は様々と經驗した、何が幸福の道であるかと種々試み且求めたが、金も幸福を興へなかつた、唯物論は破れたからである、劍も亦幸福の道でなかつた、世界大戦に於て軍國主義は倒れたからである、されば金も劍も最早や頼りとするに足らなければ、人類は何によつて幸福を見出さう、愛の外にはない、愛は人類最大の祝福である、愛の教を説く君等の使命は重い。云々
世界は斯く根本的に人類愛の教養を要すると共に基督教化されん事を俟つてゐる。

(イ) 東洋教化の眞理

二千餘年に亘る國民的素養は、蓋し無意義ではない。東洋の文化其傳統も亦決して無價値ではない。併しながら西洋文化に改造の餘地あると同様、東洋文化にも未

開拓の餘地が甚だ多い事を許さねばならない。新殖民地は勿論の事、日本内地に於て祖先以來瑞穂の國として農業國たるを誇つた處にも、尙未開拓の餘地はある、國民性には尙更の事である。之れが開拓をなす眞理は、抑も何であらうか、

靈界開拓に要する眞理は、基督の生命其ものである。世に謂ふ空漠たる信念でもなく、さりとして生命のない儀禮でもない。況んや他の爲にする方便的宗教ではあり得ない。之れは實利主義に囚はれた近代人の要求を直に満たす所以のものではないかも知れぬ。之は低級なる宗教觀念に包まれて居る現代人には、理解されないものであるかも知れぬ。併し基督教が東洋教化の爲に其使命を發揮せんとせば、此根本眞理を高調せねばならぬ。

余は文藝思潮に及ぼせる基督教の感化を見た。古い舊新約聖書は餘り繙かれなくとも、新たに書名を之れに取つた小説は多く版を重ねつゝある事實を知つた。余は曾て聖書の文學が沙翁の劇に引用せられ、宗教的題材がミルトンの詩を形成して居

る事に興味を覺えた。併し今は斯かる意義に於ける教化を、喜ぶの早計である事を知つた。思想の借衣は、眞に其人の生命たるを斷ずる事が出来ないからである。

余は社會制度の、著しく基督教的色彩を呈する事に氣付いた。習慣や生活の様式が、頓に西洋化してきた事を喜んだ。クリスマスが津々浦々にまで祝はるゝ時の、到來しつゝある事を嬉しく思つた。けれども今は斯かる意味の國民教化を以て、淺薄な喜びを感ずべきでないと思つた。何となれば洋館の借家に住み、文化生活の様式を取ればとて、直に文化の民といふ事は出来ないからである。國民教化の眞理はもつと深く、人心の奥底に浸潤するものでなければならぬ。

基督教の如何なる方面が、東洋諸民族の爲に必要なものであらうか。從來の傳道は果して根本的に、國民を教化する所以のものであらうか。此等は今や新時代の闕に立てる基督教者の、考察を要する問題でなければならぬ。同じく基督教と稱ふるも、或は單に其初代に於ける形骸のみを把へ居るものもあり、或は其發達の過程に

於て附纏ふた舊き衣に執着せるものもあり、夫等を十把一束的に主の教として宣傳せらるゝ事が、果して我國民及び今や覺醒し來れる支那民族の爲に、慶すべきであるや否や、余は疑を懐かざるを得ない。

基督教の名を冠せる異教はないか。主の名を冒せる迷信はないか。之れは理性に生くる新時代の子が、明瞭に識別すべきものである。或は信仰に由つて病を癒すといふ、奇蹟的教義を、我が同胞に傳ふる者がある。クリスチャン、サイエンスに酷似せる夫等初代の猶太人的要求を満たす教理が、果して基督の眞理であらうか。否我同胞の教化に要する眞理であらうか。種々なる形態に於ける精神治療の如きは其餘りに多きに苦しめられてゐる。宗教が夫のみであるならば、天理教は充分に其使命を果し得るであらう。今更基督教を宣傳すべき必要が奈邊に存する。或は基督再來の神秘的信仰を宣傳するのが、現代に於ける使命と考ふる向もある。されど世の終りを豫想し、審判を叫び、主の再來をいふ初代教會の糟粕をのみ與ふるなら

ば、大本教の如きが能く之れを爲し得るのである。今更基督教の其方面を説く必要はない。實利主義の動機に訴へて御利益を説くものであるならば、金光教は能く其使命を果し得るであらう。必ずしも基督教を俟たない。されば東洋教化に要する眞理は、斯かる舊時代の遺物ではない。斯かる誤られたる福音が、殊更に純福音と銘を打つて同胞に傳へらるゝ事は眞に基督教の汚辱である。斯かる變態的基督教が我邦民心に與へる誤れる印象が先入の偏見となつて、眞の基督の眞理を受納するに際し多大の障礙となつてゐる事實は甚だしきものがある。

宗教の展覽會場たるが如く種々なる宗教を有する東洋、殊に我日本に於て、眞に要求さるゝ宗教的眞理は如何なるものであらうか、其教化の方針は奈何、余は過般一教授の質問に對して次の如く答へた。

吾等は猶太の律法的衣裳を要しない。吾等は使徒時代の教義的持を要しない。吾等は基督の人格に包容せられ、其生涯と死とを以て啓示せられたる彼の生命を

要する。吾等の同胞はリバイバリストの感情的な、安價なる福音（チーブゴスベル）を以て教化されるとは思はれない。それは一時教化の方針として好ましく覺ゆるであらう。けれども根本的に此國民を教化する所以ではない。更に今後日本に派遣さるべき宣教師としては、如何なる準備を要するかの質問に答へて、

第一に彼は、充分なる科學的研究を積まねばならぬ。それは必ずしも科學を教ふる爲に要するのではない。自己信仰の立脚地を鞏固ならしめんが爲である。第二には、彼が宗教を教育し得る準備あるを要する。吾等の同胞は宗教々育に依つてのみ根本の教化を望み得らるゝからである。殊に教育心理學上の研究を積まれん事が望ましろ。と記した。余は飽迄も斯かる健實なる方針に由るの外、我國民性を根本的に教化し得るものがないと信ずる。偶々コングレッションナリスト誌には『批判の下に

於ける基督教」といふ短文があつた。其中には

英國の某大學長が、英國は政治、教育、産業及社會生活に於て、異教的であると公言した。

米國も會員の増加に係らず、精神に於ては尙希望の餘地を存する、之は東洋に反響する。

獨逸雑誌の日本通信員は報ずる。東京市長はいふた「國民は宗教的でなければならぬ。其民は神を信仰せねばならぬ。けれども東洋の道德訓は、基督教道德よりも優れて之を凌駕しつゝある」と。

此等は民心の動機及び教育を基督教化すべき事の急務を示すものである。教育が單に、現代生活の競争に對して人に力を與ふるのみであつては、文化は保たれない。マンسفールド大學のセルビー校長はいふ、英國の倫理は人々が基督教を解せぬ故に基督教的基礎を缺いてゐると。

併し知識のみでは不充足である。イエスの倫理を適應する意志が必要である。英米が基督教を解釋する精神は、日本の一市長が其虫のついた佛教よりも優越して居ると認むるやうになる事である。名のみ信者は幾百萬ありとも、基督教國を爲さない。幾億萬の金も其儘で世界の不幸を拭ふ事は出来ない。基督は市場に、工場に、而して内閣に座を占めなければならぬ。

と記されてある。東洋の要する宗教的真理は、在來の宗教の企て及ばざる、精神主義を徹底し得べき靈能の教である。

米國に於ては日本或は布哇より、果物又は苗木の輸入を禁じてゐる。蓋し之に附隨する害虫を懼るゝからである、東洋も亦基督教の移入と共に、種々なる異邦的の習慣や方式の、舊き衣までも輸入する必要はない。夫には害虫の卵も附着して居るであらう。吾等の要するものは、基督の生命を含める教の種子である。

(ロ) 東洋教化の使命

先年東洋を視察して歸米後各地に講演をなし、米國精神界に大なる感興を惹起したフオスチック博士は、「西洋の基督教は革新を要する乎」と題して、紐育第一長老教會に於て述べたる演説中にいはれた、

先づ吾等は思想の革新を要する。吾等は現代最新の知識と、基督教思想との一致を今一層心から歡迎し、且積極的に述べなければならぬ。此福音と新知識との愚かなる論争は、餘り長い間續き過ぎた。其争闘のない時にも、吾等は新知識の防禦に餘り長く骨折つて、進化論や自然則や、一般宗教の歴史的研究、殊に聖書の夫に對して、恰も新らしき科學的真理を受納する事が、何等か怖ろしき異端であるかの如くに考へられてゐた。宗教に關して科學的方法を採用する事が、怖ろしい異端であらうか。否それは履違えた事である。吾等の子女等は科學的方法が

許されて居る學校に學ぶ、而して最も怖るべき信仰上の打撃は、彼等が科學的思
索と福音との孰れかを選ばねばならぬと考ふる事である。

とて、教授は其東洋に於ける反響に説き及んで曰く、

此問題は郷國に於て重大であると共に、支那日本に往くならば其極頂に達して居
る事を知るであらう。支那に於ける學生の奮起は、近代史上一の知的刺戟である。
北京のみにも二萬乃至三萬の學生が居る、彼等は一足飛びに其古傳説より新知識
へと移つてきた。彼等は祖先の心を奴隸としてゐた迷信を、紙屑の如く投げ棄て
つゝある。而して今や基督教が中世紀の衣裳を纏ふて彼等に提示される時に、彼
等は如何にすると思はるゝか。一人はいふた「新しい迷信を取入れるために、
古い迷信を放棄する必要が何處に在るか」と

迷信に代ふるに、少しく變形したる迷信を以てし、迷妄に代ふるに、少しく新衣を
纏ふた迷妄を以てし、唯低級なる宗教觀念の満足にのみ腐心するならば、今更基督

教を東洋民族に紹介すべき理由がない。即ち從來ありふれた安價な福音は、何等東
洋に於て其使命を有せない事が、見識ある人々に承認せられてきた。

更に博士は、尙一つの重要な點を指摘せられてゐる、曰く

「吾等は餘りに個人的なる宗教觀念を革新せねばならぬ。東洋より歸り來る者は、
福音が單に個人的の事のみならず、社會的使命を有し、之を等閑視するは基督教の
滅亡である事を高調するの、當然なる事を確信するであらう、教會が社會問題など
には全然關係せずにあく事を望むといふ者に、時には人々が同情を表する。多くの
牧師は其理解せぬ問題の判斷を下して世の嗤笑を招くのも事實である。……
併し若し其爲に傳道教會上の努力を誤り用ゐると憤り、又は良心の覺醒よりも
寧ろ感情的の慰安を求むる者があるならば、余は彼が日本に往き佛教の現狀を調べ
られるやうに勧める。佛教は此等の個人主義者が要求する事を爲してきた。それは社
會的福音を有せぬ。それは曾て一度も斯かるものを持たぬ。それは純然たる個人の慰

安と救済との宗教である。佛教々師のいへる如くんば「宗教とは現在の境遇に在つて安心を得る方法である」といふのが佛教の定義である。彼は更に語をついで「我宗教は道徳とは何等の關係がない。純粹の宗教である」と。

されば此純粹宗教の實際的結果は何であるか。一例を挙げしめよ。東京の最も繁昌する佛寺の傍に、有名なる吉原といふ公認の大遊廓がある。人の言説に誤られないやうに、余は此怖ろしい場所を視察した。信者なる日本人の案内者はいふた。

「我同胞の恥を米國人にお見せするのは心痛の至りである」と。けれども政府が公認して居るからであるが、基督教の米國にも同じ種類のものがあるではないかと或者はいふであらう。夫に對して余は否と答へる。少くとも吉原には、米國同様の場所に見られないものがある。其處には寺院がある。其附近の商買の爲に捧堂された佛寺がある。余は夫を見、其壇の前に立つた。そして年に一回佛教の僧侶等は、儀式の禮装をして、吉原の繁昌を祝福するために出で行くのである。……東京市長

後藤子爵と個人的に面談する機會を得たる余は、此問題を提起した。そして「日本の幾百萬の佛教信徒間より之に對して何等の反對もないのであるか」と問ふた。クリスチャンならざる彼は、佛教側からは曾て一の反對の聲をも聽かぬ——而し反對は今やクリスチャンの方から起つて居る」と答へた。然らば如何なる宗教が要求せらるゝのであるか。楽しくとも單に現在境遇の中に於て安心を得しむる方法としての宗教であるか、或は波瀾を惹き起すとも單に人の胸臆に於てのみならず、社會生活の組織に於て、不義を憎み正義を愛する宗教であるか。余としては最早基督教が個人に對して使命を有し、社會に對して之を有たぬといふ人の言に耳を藉さない、余は單に個人のみ爲に働いた宗教を見た。神よ其道より我等を救ひ玉へ」と

斯く博士は神學と一致せざる信仰を新傳道地に傳ふるの愚を指摘し、合理的宗教が東洋教化の爲に必要である事を説き、且不知不識の間に個人主義に陥れる從來の基督教が、社會的に改造さるべき必要を高調された。我邦に於ても從來歐米宗教界の

糲粕を嘗めて、基督の教を低下して個人の安心立命の具と化し、又社會的福音の何ものたるかを解せず、敢て之を誹議する程の一般的誤謬に陥つてゐる、其儘にして國民教化を望むは本より不徹底であつて、佛教の覆轍を履むならば所詮基督の使命は果されなす。

(ハ) 宗教生活の革新

人性本然の發露は、基督教的になるべき筈である。されど人心は餘りに種々なる不純のものに蔽はれてきた。英米の如く幾代かの基督教生活を繰返す民族の間に於てさへ、人類の弱點が混入して、純真なる基督教的動機を離れんとして、識者をして憂へしめ、根本的に宗教を育をなすの要を叫ばしめてゐる。況んや幾多の異教的思潮が錯綜せる東洋の空氣中に、幾代となく浸潤したる民心が、餘りに舊來の陋習に囚れ居るが爲に、甚だしく地方的の濃厚なる色彩を發揮し居るが爲に、基督者たる

幾十年の經歷を有するとも、未だ根底より基督教的動機を以て生活を全ふする事が覺束ない。之れは野生の橄欖である。基督の葡萄の枝は、其蔓木に接がれたけれど、依然として異教の地層の中に其根を挿入してゐる。其根の或部分は、思ひ切つて切斷されなければならぬ。

「日本の基督教は革新を要せざる乎」てふ問題は、歐米宗教界の改造に比して更に緊要なる事實である。斯く異教徒の細胞が多く混入してゐる日本の基督者は、自覺せずして基督者ならざる動機に由り動いてゐる。所詮移殖に依つては、純眞の基督者を得られない。育種の方法こそ、根本教化の方針でなければならぬ。悔改を逼つて、之れに基督教の衣を被せた基督者が、縱令幾百萬出來たりとて、名のみ基督教國は形成せられんも、神の王國は實現さるべくもあらぬ。

宗教觀念の低級なる爲に、現代の教會生活をして基督の理想を距る遠きものとなさしむる虞がある。或は教會の經營の爲に、青年や兒童に傳道するの愚を考ふ

る、經濟的頭腦を有する信徒も生ずる。或は牧師の任務は結婚の媒介や、夫婦喧嘩の仲裁や判や、無學者の代書業にありと思ひ做す者もある。此等の人事に關する親切の行爲が、人を救ふ道と考ふる向もある。されど斯かる方法を以て基督者の列に加へられたる者が、果して能く基督の神の國を形成する健全な分子となり得るであらうか。斯かる低級の觀念は從來の宗教家なるものが、民心に與へた異教的習慣に過ぎぬ。高砂屋乃至は極樂屋の業たる閑問題は、宜しく之を書畫骨董を弄ぶ餘裕のある宗教家に托すべく、寢食を忘れて神の國の宣傳に努むる基督と其傳道者とは餘りに不似合のものである。基督教が若し冠婚葬祭を以て第一義と解せらるゝに至らば、そは驚くべき墮落である、佛教や神道以上に基督教を要する所以のものは、斯かる儀禮に在るのではない。日本に於ける基督教は其國民性を聖化し、之れを培養する靈的の糧でなければならぬ。否我國民の靈性を形成する、生の細胞でなければならぬ。現代の民心は其求むる處を知らずして誤れ

る要求を基督に提出する。恰かも二人の弟子が其左右の大臣たらん事を求めたと同様である。現代の要求に應じて福音を宣傳する丈では甚だ不徹底であり、且不明の譏を免れぬ。來るべき時代の要求を見越して基督者は純なる基督の心を同胞に頒布せねばならない。而して野生的の島國根性や、異教的なる野卑の心根を、純なる聖なる、正しきものと聖化せねばならぬ。

(二) 靈界開拓の使命

東洋諸民族の靈的生命に基督の心を灑ぎ、其細胞を教化し、未開拓の國民性を充分に開發擴充せしむるは、基督教の東洋に於ける最大使命である。而して此使命を果さんが爲に、世は靈界の開拓者に俟たねばならない。凡そ開拓者先驅者は、前人未踏の地に自ら其足を進むる者である。地理的のバイオニヤトは、文化の境域を蠻地にまでも擴充して往つた。科學的の開拓者は雷を制馭し、細菌を捕へ、新發見を

なしては人類の爲に貢献してきた。産業界の開拓者は、より速なる生産とより廣き分配とを以て社會の爲に奉仕する。政治界の開拓者は、舊き制度を革新して、新しい法政の下に民衆の幸福を増進する。其要する資質は、見識と勇氣と忍耐とである。精神界の開拓者は、尙更に此資質を發揮せねばならぬ。東洋に於ける基督者の使命は、此開拓事業に在る。創草の時代より萬難を排して殖民地の開拓に従事せし者も、半途稍々其業の成らんとするに及んで、脆くも挫折するのが例である。日本の基督教徒が過去半世紀間純真なる基督の生命に充されて、此開拓事業に携はりつゝあつたならば、教化の上には更に見るべき結果が認めらるべき筈である。空名を擁する似而非なる信徒や、旗幟不鮮明なる會員が如何に多くならうとも、基督の王國の爲に増減する處はない。

基督の生命たる根本眞理は、何れの國民をも活かした。また、東洋の要するものは其生命である、そはチュエトンの血に流れ込んで「義人は信仰に由りて生くべし」

とルツテルを蹴起せしめた。佛國の片田舎にラテンの細胞を改造しては、カルピンを生んだ。伊太利の地に深く生命の根を下しては、サボナローラーを育て上げた。そは更にスラブの血精に編込まれてはトルストイの人格に結晶した。そはアングロサクソンの中に地盤を占めてはノックスやリビングストン、さてはビュリタンの血脈を通じて、遠く新大陸に幾多人道の偉人を輩出せしめた。今や太平洋の此方、東洋民族の歓迎すべきは、此生命の種子である。吾等は純真なる基督の教を、誤りなく同胞に願つべき使命がある。

四、現代教會の教育

現代教會は如上の使命を果さんが爲に、三つの方針を樹立せねばならぬ。其第一は教會の教育であり、第二は教會の宣傳であり、其第三は教會の社會奉仕である、以下逐次其方法に就て述べたい。

教會が何の爲に存在するかを一言以て掩ふならば、それは宗教道德上の訓育及禮拜の目的の爲に、設けられたものであるといふ事が出来やう。即ち教會の根本的使命は、其宗教々育に在る。教會は學校と同じ基礎の上に立てられたる機關である。

現代教會は理想を自覺し又世をして之を知らしめねばならない、それは單に教會學校の教育を重視するといふ事のみならず、教會事業の全部が教育的理想を以て行はるゝ事を意味する、教會の眞生命を發揮すべき確實なる道が爰に横はつてゐる。基督者は何の爲に其身と心と頭腦と財力との、尊き資本を投資しつゝあるか。神

の國の民、則ち社會公共の協同生活に對し、何等かの貢獻をなすべき人格を生産せんが爲である。而して人間に取り、斯かる社會的存在の意義を發揮する以上に、價値ある生涯はない、未來生の安神や、現世の慰安は、決して基督の根本的主張ではなかつた。此神國建設の大事業の爲に、現代基督者に對する神の召命の聲は、高く且明瞭に響いてゐる。

(イ) 現代教會教育の缺陷

先づ宗教々育の實狀に就て考へ之を基礎として將來に對する暗示を與へたいと思ふ、今之を述ぶるに方り主として例を米國に取つて比較を試みんとするは、世界に於て米國が此方面に最も進歩し居るが爲である、又多少統計に基いて考へたい爲に、平素此方面に餘り關係せられざる者には興味のない事であるかも知れない、以下之を十ヶ條に分つて述べんとするも現在の不充分なる事を皆消極的に説述するの止

ひなきは遺憾である、併し之は徒らに悲觀せんが爲でなくして、現狀に安んぜず益々其發展を圖らんが爲である。

一、教育的プログラムの不徹底

米國に於ては世界大戰に際し、佛國へ出征したる青年軍人の宗教々育程度に關し、從軍牧師其他よりの報告を基礎として出版されたる「米國人間の宗教」と題する一書の爲に、戦後大なる警醒が與へられた、其所報に徴すれば、從來の教會が與へたる宗教々育の不徹底なる事が瞭かになつた、從來青年は

(一) 神觀に就ては漠然一種の能力の存する事を認むれども、基督の神、天の父なる觀念に於ては甚だ不徹底である事

(二) 基督觀に就ても彼を偉人聖賢として崇敬するも、救主として日常生活に密接なる關係ある者とは意識せぬ事

(三) 教會觀に於ても其出征榮譽表に掲げられる程の關係はあるが、會員たる自覺即ち教會意識に就ては甚だ不得要領である事

之等は米國青年の宗教心の横斷面であるから、過去廿五年に亘る米國教會の宗教々育が不充分であり、其教育的プログラムが不徹底であつた事を物語つてゐるといふのである。尙米國に於ける「戦争と宗教調査」委員の報告中に

「吾々の得たる證據に徴すれば、教會の過失に關し從軍牧師又は宗教家等に投票せしめたならば、大多數は教會の教育上の失敗を擧ぐるであらう、吾々は徒らに廣く社會に知識を散布して、我會員の教育に成功しなかつた」といふてゐる、之は獨り米國のみの實狀ではない、

英國教派同盟委員の報告中にも亦左の如き一節がある、

「恐らく我邦の青年の五分の四は何の教會にも直接の關係を有せぬ。而して此現象の背後には、基督者の依て以て生活しつゝある信仰に關し、又其抱懷する生活

の理想に關し、深き誤解の横はる事を示してゐる、爰に警戒すべき事實があり、確に何か誤てる點のある事を證明してゐる、吾々は其隠れたる缺陷の原因を發見し、如何にもして之を匡さねばならぬ時がきた」と。

更に「世界教化運動」(インター、チャーチ、ウオールド、ムーブメント)の調査報告は最も精細を極めたものであるが、其中宗教々育に關するものは大に吾等の參考とすべき點がある。今其の要項を掲げて見るならば、

プロテスタント教會の家庭に於ける

廿五才以下の青少年の數は

一六、九三五、〇〇〇人

其中教會學校に在籍する者

一五、六一七、〇〇〇

教會の教育的プログラムに入らぬ者

一、三一八、〇〇〇

教會學校の在籍生中にも多數信者の家庭以外より來る者ありとせば、新教々會の子女の幾百萬が、教會の教育を受けずに過して居るといふ事になる、更に

教會學校と全然關係せざる青少年の數

二七、二七四、〇〇〇

即ち全數の六九、三%、約三分の二の多數青少年は、宗教的無學の儘に在るといふ現狀である。

斯く新教に關係すべきものは

三分の二迄宗教的無學

猶太教

二十分の十九

カトリック教

四分の三

之等を平均すれば米國の青少年中十分の七は、宗教々育を受けて居らないといふのである。

最も宗教々育の進歩せる米國に於て尙且斯かる現狀である、而して教會學校の方も、全數の四十三%は、生徒平均百人以下といふ小さい規模のもののみである。

之を我日本の現狀に就て調べて見ると、一九一〇年より同六年の間學校も生徒數も共に略々倍加したが未だ前途遠遠である。

(イ) 學校教育を受けつゝある青少年

八、五五二、〇九三人

宗教學校に於て教育されつゝある者

三四、四八〇人

基督教々育に接せざる者

八、五一七、六一三人

即ち宗教學校の生徒は二百四十八人中に唯一人、略々二百五十人に一人の割といふ事である。

(ロ) 尙一般の青少年廿五才以下の者の数は 二五、〇〇〇、〇〇〇人

其中宗教學校及日曜學校夜學校等にて

基督教に接しつゝある者の數

二二五、四六七人

之は大五九年末の比較であるから稍々其比率を増したとして、先づ凡そ百分の一即ち百人中唯一人が宗教的教育に接して居ると見る事が出来やう。

之は實に惜むべき數字上の表示である、迷へる一匹の小羊をさへ求むるといふに、我邦に於ては他の九十九が迷へる小羊である、以て如何に教會の教育的プログラム

が包容し得る範圍の狭少なるかを知る事が出来る、現代教會は此大なる缺陷を補ふために何等かの方法を考慮せねばならぬ。

二、教育上訓育時間の不足

教會の教育的プログラムが多數青少年を包容する能はざると共に、其與へつゝある教育が、内容に於て不徹底である事も亦否み難き現状である。

米國に於て一年平均生徒一人の受けつゝある訓育時數は左の如くであるといふ。

猶太教

日曜學校八十五時間

週間日教育二百五十時

計三百三十五時

カトリック教

二百時間

新教

二十四時間

一ケ年の日曜回数中公休の日を控除して四十八回となさば、二十四時は其半數で

ある、即ち生徒の出席不十分なる爲、事實上半ケ年間の教育より出来ないものである。之は我日本に於ても略々同様である、札幌組合教會に於て分校生や傍聴生を省き本校の在籍生のみ就て調査したる處によれば

大正十一年四月より大正十二年三月迄一ケ年間

三百四十四人の出席平均一人二十四、三を示した、

此中には一年四十回以上出席を以て賞與を得たる百二十四名を含んでゐる故に、如何に怠慢なる生徒の爲め折角一年の教育が、平均半年の事業に終るかを知る之等の事實より推して、如何に週間日を利用する宗教々育の緊要であるかが瞭かである、之れ目下米國に於て切りに稱道されつゝある處、一日二時間づゝ十二日間教ふれば前記の出席による一ケ年分の訓育が出来、四時間づゝ十三日間行へば完全に五十二回の日曜分を興へる事となる、之れ即ち

(イ) 週間日宗教々育機關の施設

をなして、或は小學校との協定により、其一定の時間各教會の牧師が教室に於て教育するか、或は小學校よりの歸途各教會に於て教育するか、などの工風が凝らされてゐるが、我邦に於ても斯かる時は來らねばならぬ。

(ロ) 休課日聖書學校

夏期なり冬季なり、公立學校の休課期間に於て、宗教々育を試むる事は最も適當である、一は休課中に悪感化を受くる事を防ぎ、他は短時日に於て有効なる宗教々育を爲し得ん爲である。

(ハ) 宗教幼稚園の教育

余は殊に此教育機關が多くの教會に於て設立されん事を望む者である、之は第一、根本的に幼きより宗教々育を爲す事であり、第二、家庭の教化の爲にも有力なる機關であり、第三、毎年卒業する者を以て組織する教會學校の堅實なる基礎をなす事であり、第四、教會の社會に對する教育的奉仕の爲に權威を増進する事である。

三、教授力の不徹底

何れの教育機関であつても、其教師の數と能力とが教育上重大の影響を有する、教會學校に於ては果して幾何の能力を發揮し居るであらうか。

米國の代表的一州の平均を見れば、一校教師八名職員五名となつてゐる、先づ今日此程度の教授力を有する學校は多數であらうが、之を以て幼稚科より高等科迄の正當なる級別教授は不可能である、而も何れの教育家も少くとも數年の準備をなし教育に當るのであるが、教會學校教師のみは、一二週の講習をさへ受くる事なく教師となる者が多い、宗教々育は信仰なくしては出來ない、けれども尙も教育である以上、單なる熱信丈けで爲し得べき事業ではない。

剩へ米國に於てさへ多數の教師は其教案を土曜の夜か或は日曜の朝になつて準備するといふ、我邦に於ては如何であるか皆能く知る處である、之等の教師が牧師

にも校長にも何等指導を受けずに放任されてゐる、此有様であつては容易に其能率をあげる事が出來ない。

我邦に於ける教師數は一校平均二名に過ぎない、之は一人の教師にて多數の生徒を教へ居る田舎の學校が多數を占めて居る事を示し、一人受持生徒平均三十名程になつてゐる、之が將來の發達を期するには、差當り教師を三倍加すると共に、生徒を倍加する方針でなければならぬ。

教師養成は目下の急務である、何れの教會に於ても之が爲に牧師其他の指導による師範科又は青年科により之を圖るべきである、又各地方の講習會は更に盛に之を企てなければならぬ。

四、課程教材の不準備

統一制學課が近代教育的心理學の批判により、不適當である事は何人も承認して

きた、而も今も尙之に似たる制度のものを要求する聲が多い、又斯かるものに準據して居る事は決して少なくない、之は教師の不足や後に述べんとする施設の不備なるが爲め己を得ないとすれど、全然小學中學の學年に相應したる級別が出来ないにしても、せめては科別教授をなすやうにせねばならぬ、之れ近來米國に於ても、科別課程の編纂されつゝある所以であつて、我邦に於ても其必要なるを思ふ者である。尙從來教案又は教科書の編纂に方つて、主として訓育のみを考慮されて來たが、之よりは課程（カリキュラム）の中に、禮拜も訓育も訓練も亦加味すべきものである。而して時勢の推移は自然課程の色彩を改むべき要求を感じしめる。殊に戦後の社會に生育する兒童の教育に對しては根本的に其改善を促すものがある、從來の何ものも皆充分なりといふ事は出来ない、社會的に、國際的に之を改むると共に、更に公立學校との聯絡により、宗教に關する教課は教會學校に於て與へ、之を一般教育の點數に加ふるやうな時代を招徠せねばならぬ。

五、施設及經費の不備

米國諸教會に於ても教會學校の校舍が完備せるものは寧ろ甚だ少ない、其七〇%は全然級別教室を有せず、十中七まではメイン、スクールと稱へて、大廣間に各々割據して卓子を圍み喧ひすしくやつてゐる。

其經費も代表的の州に於て一校平均百弗、即ち一日曜約二弗の費用を以てやつてゐる、大多數は此以下であると思なければならぬ。

我邦に於ては最初より日曜學校に重きを置ける良習慣を有せるが故に、經費の足らざる割合に、設備にも級別にも苦心の跡を見る事が出来る、けれども未だ教會の事業として教會の經常費豫算に計上して居らない教會がある、之を爲し居る教會は凡そ六割である、他は皆教師や校長の個人經營の如きものであらう、之は是非とも教會の教育事業として教會支出に計上したいものである。

施設の不備は、如何に級別的教案の課程が備へられても、所詮之を實施する事が出來ないやうにしてゐる、我邦三千の學校中完全に級別制を實施し得るものは五十校を數へ得るであらうか、米國は三割實施し居るに對して我邦は僅に二分程であつて、甚だ心細い次第である。

六、編制及管理の不備

教會に於ける教育が重大の意義ある教育であるといふ思想は、未だ一般に普及されて居らない、故に教會學校の教師も生徒も特に此意識を養はねばならぬ、之が爲には、教務の充實を圖らねばならない。

而して先づ教會學校の制度として進級制を取り、進級式を舉行する事は、大に斯かる精神を養成する所以となるであらう、それと相對して是非とも實行すべきは教職員の就任式である、これは極めて單簡なる精神的の式として舉行し、一には教職員の

使命に對する自覺を新にすると共に、會員及生徒の働に於て其職責に對する信任を新たにすることとなるのである。

學校内部の組織に就ても亦新たな考慮を要する、一言以て掩へば學校内でデモクラシーを應用すべき事である、鐵道の工場に労働問題の起らなかつたのは、其最初より委員制度を採用された爲である、何れの學校も其組織に於て同様デモクラシーの制度を採り入れなければならぬ、或は學校全部を一のプロジェクトとなし、禮拜の順序に關しても集金の用途に就ても、時間の問題に就ても皆生徒側の協定に俟たなければならぬ、生徒側に斯かる要求を持つて居る者は甚だ多い、偶々其様な意志の發表を見る時、或者は子供扱にして之を輕視するもあり、或者は憤つて生意氣の子供等自ら勝手に試みよと放任して、教會學校の船が破船するとも沈没するとも敢て願みない者もあらう、而して最も賢明なる教師は彼等の協力を喜び、同情を以て其後援をなす者である。

余は各級を代表する生徒委員會を實施して見て、恰も少年教會（ジュニオール、チヤーチ）の如き組織が、如何に彼等の興味を惹起し、協力を得る所以であるかを知つた。此頃四角同盟（フオーア、スクエーア、リーグ）なる制度を採用すべき事を推奨する者もある、兎も角何等かの組織が學校に應用されなければ、到底現代の青少年を指導する事は出来ない。

少女歌の組の組織も亦此方面の一助となる有効な組織である、其他青少年男女の共勵會の如き、何等か訓練の爲に必要な組織を設けねばならぬ。

七、文學出版の不足

宗教教育に関する文献は、勿論米國に於て頻々として汗牛充棟の如く出版を見てゐる、吾々が教師諸氏に推薦したき英書のみにも百種以上に上つてゐる、夫れ等を通讀せらるれば宗教教育の問題に關して先づ充分なる資格を養ひ得るであらう、

而るに我邦に於ては此方面に於て今日迄甚だ貧弱なるを失れない、其翻譯より著述までを合算して見ても、凡そ三十種に過ぎない、今後此方面に一層の努力を要する。

八、事業組織の不統一

宗教教育は全國全教派を通じての共通の問題であるが、日曜學校協會を中心として尙一層各教派の組織的活動を要する、此組織的協力の缺けたるが爲に蒙る全體としての損失は決して尠くないであらう、先づ努力の重複を避くる事を圖りたい、地方に巡回するにしても或は講習會を開催するにしても、各派と本部との間に協力を一層密接ならしめねばならぬ、又各派の間には勿論不必要なる競争が行はれてはならない、宗教教育の問題は此方面に興味ある總ての人々と、總ての教會の協力を要する大問題であり、廣汎なる範圍に亘つてゐる、故に雑誌の如きも亦各派を通じて、權威ある一宗教教育の機關雑誌が、我が思想界に提供さるるやうになる事を望んでゐる。

九、教育的理想の缺如

此頃「宗教の改造」と題するエルウードの新著が、米國教界一般に刺戟を與へてゐるが、要するに世界の總てが科學的に又民主的に改造されつゝある現狀に應じ、教會も新しい組織を應用する程の、理想が樹立されねばならぬといふのである。

「教會は眞實教育的機關でなければならぬ、そして教會は自ら之を意識し又根本的に教育的機關と認めらるゝ迄は、正しく其使命を果す事は出來ない、且人類社會も亦正當なものとはなり得ないであらう。」

之等は代表的の意見であつて、今後教會が權威ある精神的機關たる爲には、全教會が基督教教育の理想と目標とを以て支配されなければならぬ、教會員の總てが其中心の事業として宗教々育を行ふやうに、其教育的理想を發揮すべきである、今日迄此方面に於て教會は其理想を缺いてゐた、現代教會の會員は今や新たに此大なる

抱負と理想とを養ふ事を焦眉の急と信ずる。

十、教育的見識の不徹底

宗教々育は果して何事を爲し能ふであらうか、其職能に關して見識を缺いてゐる事は、此事業の思はしき發展を見ざる主たる原因でなければならぬ。吾等を以て之を看れば、宗教々育は唯一の徹底したる教育を爲し得べきものである。

宗教々育の預言者ブツシユネルが「基督教々養」を公けにして、此方面に新たなる刺戟を與へたのは僅に三十五年前の事である、基督教會は斯くまで教育に關する見識の發揮を缺いてゐた、彼が「蛇鳥の教養」なる題下に記せる處は如何にも諷刺に富んでゐる、現代人も亦其子女の品格の發達に關して蛇鳥の如く無頓着であらうか、彼女は卵を生み落した事實の外、後には踏潰さるゝとも、奪ひ去らるゝとも更に意に介しない、古への預言者が「我民の女たちは殘忍にして荒野の蛇鳥の如し」と

いふたのも同様な悲嘆である。

此頃ボストン大學のストリックランド教授の記せる處を見るに

「倫理教育と宗教々育とは大部分同じ目的を追及するやうに見えるけれども、其教材と方法とに於ては多大の變りがある、倫理教育に於ては行爲の動機を模倣と習慣とに置くのであるが、結局抽象的倫理原則に忠實なる心を發達せしめんとするに在る、「善」といふ行爲は「正義」であるからといふ、そして其正義といふ事は其一國の者に取り、習慣的のものより社會全般の福祉に至る迄の、限りない段階を總括してゐる、道德的法則は神の意志であるから總て之等も宗教々育に含まれねばならぬ、けれども宗教的動機といふものは其獨得の或要素を有してゐる。

之等は神に對する敬虔の念と愛と、神意に對する忠真などの事である、斯く宗教的動機は人格的態度を通じて大に暖か味と力とを有するに至る、勿論之等はイエスの教へられたる如く最高の人格——神聖なる父として神を認める事を意味し、

吾々の最高の社會的理想を投射したやうなものではない。

とあつたが、之は眞によく從來の倫理教育の不徹底を示せると共に、宗教々育の獨特の價値を表はしたものである、從來完全なる倫理戒律を以て導かれたる儒教が、更に權威を發揮し得なかつた所以は、慥かに宗教的信念を閉却したるが爲である、宗教々育に由らずしては、所詮國民道德の充分なる發揮を見られない事を確信したならば、今一層此見識を以て事業の發展を企つべきである。

以上述ぶる處の十ヶ條は、悉く消極の方面より觀察して來たけれども、之れ現在の有様に満足せずして、爰に新たなる飛躍を試み、我邦宗教々育事業の著るしい進歩を見たい爲である。

茲に於て宗教々育の改善は急務と目せられてゐる。我日本に於て新教宣傳半世紀の後に至り、今も尙教會として大なる建設なきは同様の過失である。

此等不徹底の理由は、從來教會が宗教々育を、一部少數者の道樂事業となし、教

會は兒童を始め青年等の教育などに携はる餘裕なく、專念傳道救靈に努むべしとなした謬見が横はつてゐて、教はんが爲に墮落せしめ、悔改せしめんが爲に罪に陥らしむる如き矛盾を繰返し居つた爲である。又一には教育の方針と其方法とが、現代の子を教養指導する迄に改善されてゐなかつた爲である。由來教會の教育としいへば、神學說亦是教義、或は聖書の解釋以上に出でない。斯かる中世的教育觀念が今も尙教會員の心を占めてゐる、教會教育が眞に何を意味するか明瞭に意識せぬ結果は、著るしき缺陷の暴露となつた。

(ロ) 宗教教育の社會化

宗教教育の目的は、無論神國の民たる社會的人格の建設に在る。自然其教育は社會的色彩を帯びねばならぬ。政治、産業、及び社會組織に没交渉なる教育は、基督者に取つて甚だ不充分である、其倫理道德すらも、重に個人的道德を取扱ひ、社會

的道德の高調を忘れてゐる。故に教會の社會的活動は、たゞ偶發的の事に止まる。更に教會が宗教的訓育上、其獨斷的教義を專賣者の如く取扱ひ、比較的進歩改善を忘れたる事が、不徹底の一因をなしてゐる。此偏見が基督者の心を支配することは可成り強く、デモクラシーの本源たるべき基督教會に、其現實は見られずして、却つて政治的デモクラシーが先鞭をつくるやうな逆轉を示した。

結局教會はイエスの如く、直き生涯を送るやう民衆に教ふるのが其事業である。其教育の中には、社會的、産業的、政治的關係も包含されて居らねばならぬ。何となれば此等の諸關係に於て、人の生活が行はるゝからである、而して斯かる教育の社會化は、教會が卒先して實施し得べき教育上の要件である、

教會が斯かる教養を企つるには、それは深刻なる印象を人心に與ふる方法に出でねばならぬ。ルナンも斯ういふた、「我等の子等は基督教の感化の下に教養された。されど我等の孫等は影の影、而も臚るげなものを繼承せねばならぬ」としたら、如何で

あらうか」と、教會の教育は一層明確に、且徹底的であらねばならぬ。夫には宗教々育の發展が必要である。そは一層教育的に行はれ、且日曜朝以外に擴充されなければならぬ、今や米國に於ても如何に週間日を以て宗教々育を爲すべきかにつき多大の研究が拂はれてゐる。教會の門戸は天國の門の終日閉ぢざるが如く、文字通りに毎日開放されて、教育の爲に用ゐらるゝ事を要する。

(ハ) 現代教會の講壇

教會の講壇も亦時代と共に推移せねばならぬ。教權を以て迫るカルビン主義の色彩は、最早や到底自由の靈を率ふる事が出来ない。其流を掬める新英州神學も、亦寧ろ一種の滑稽と見らるであらう。ウエスレーもムーデーも、其儘にして現代に復活したればとて、感化の力は甦らぬであらう。況んや彼等に似せたるものに至つては、寧ろ一種の狂言とも見られる、聖書に絶対無謬

の權威を置く宗教改革時代の遺物は、其後四百年の科學時代を通過したる現代人を首肯せしむる事は出来ない。頑冥不移、一の教義や形骸に立籠る老成退嬰の人を除いては、講壇に新らしき、色調を期待するも亦止を得ない。一青年はいふたと傳へる、「僕は我が牧師が希くば學識に於て優れて居つて貰ひたい。少くとも僕と同等位の知識を有して貰はねば、僕は聴きに行かれない」と。無論之れは自己中心の申分であつて、禮拜に於て受くるよりも與ふる事の幸を解せぬ矛盾を表はしたものであるが、亦以て若き心の傾向の一斑を知るに足るであらう。

説教者は講壇を其生命としてゐる。講壇上には基督の外何人も容嘴すべからざる權威は、彼が人格的に保有すべきものである。されど説教者をして眞に説教せしむるものは、其會衆である講壇に對する會員の責任は、説教者と折半すべき科のものがある。何となれば講壇は廣義の教育であつて、教育は教へられんとする要求なくしては成立し得ないからである。

或者はいふ、近來講壇に力なきは、本來の純福音を離れ、脱線して社會的福音などに馳するからである。講壇上會衆が毎日没頭し居る同じ社會の複雑な問題を論ずるが如きは、講壇を俗化せしむる所以であり、勞れたる靈魂の要求は爰に慰安の聲を聽かんとするに在ると。憐れ低級なる論者よ、基督の福音は肩を撫で足を摩する底の、マサージ式宗教に含まれ居るものではない。それは彼の苦難の裡に、希望と喜悅を見出す悲壯の心理に存する、之れ彼がイスラエル思潮の精華、豫言者の宗教より稟けて發揮されたる、獨特の光彩である。古豫言者も亦重に貧富や度量衡や、境界線や、政治問題に就て論議した、而してそれは基督教の準備となつた、彼等の事業が果して俗化したるものであらう歟。

教會をして俗化せしむるものは、説教の題材ではない。其會衆が單に冷たい批評眼を以て、教役者の舞臺に演ずる劇を観んとする時、社交目的の爲にのみ集ふ時、常に何等かの利を得んと望み居る時、爰に天籟の聲を聽き能はぬに依るのである。

健全なる會衆は、教會を靈戰の參謀本部と解して、基督の命に傾聴するの用意がある。傷める靈の病院としても、それは互に新らし一週の戦線に立つ爲に癒されん事を望む、雄々しい心懸けでなければならぬ。

之は著者の獨斷でない、現代思想家の教會に對する囑望の聲である。其一例として左にエルワード教授の説を掲げやう。

病院としての教會 觀は新教會の耻辱であつて、放棄すべきものである。教會の主要なる事業は其會員の肉體的靈的の病を癒したり、慰安を與へたりすることではない、斯かる觀念は教會の事業を個人的利己的にする、そして宗教に於ける利己的個人主義は基督教の精神に敵するものであつて、教會内に異教主義を培養する所以である。……教會は不斷其會員に彼等の個人的福祉や慰藉が求むべき主要目的でない事を心に止めさせなければならぬ。

とて更に進んで個人の教育的機關としての教會 觀すらも未だ不充分であると述べ「端的にいへば其終局の事業は人類の社會的救濟——則ち基督教的世界の創造に在る……それは習慣制度の改造を意味する、それは個人と共に團體の政策及行動を形づくる事を意味する、教會は個人の傳道と共に社會的傳道を要す」と云ふてゐる。

(三) 現代教會の指導者

社會萬般の事業は、皆其指導者に依つて成敗が決せられる。精神界の事業も、亦此選に洩れぬ。教會の不振は、基督敎界に現代的指導能力の缺如せるが爲である。敎役者も教會役員も一層明確に、指導の責任を意識せねばならぬ。此自識を缺ける處には、後繼者を見出す事が出来なす。

人類文化の危機に際して、傳道界は何よりも眞の靈的生命に充てる若き胸に、反響を見出すべき筈である。社會民衆の幸福の爲に、終局の解決を與ふべき使命は、敎師の手に委ねらるゝからである。此絶好の機會を敢て擇ばんともせで、滔々たる天下の若人、此軌道を逸し、神學を修めし者にして、尙且上乘なる者が社會慈善事業に携はる位である。之れ實に教會の指導其宜しきを得ぬ所以である。教會は其敎師に臨むに盲目の手引や姑の態度を以てしてはならない、彼を遇するに宗教上の專

問家を以てし、其所説の全部を承認し難くとも、少くとも敬意を以て其至誠を尊重し之を聽聞する襟度を示さなければならぬ。從來教會が其先入固陋の見を以て之を其敎師に強ふるにより、幾多の人材は去つて更に有効なる社會奉仕を企つるに至り、双方共に失望に陥つたものである。若し教會が眞心より敎師の後援者であるならば、敎師は教會といふ有力なる機關を有する。其中には多額の富源と、立派な資料と、善美な歴史とを包容してゐる。而してそれ等の隠れたる富源が、曾て展開を見ずして埋没されてゐる。教會の先輩者等は、敢て其發掘を企てない。自然教會は其社會上の指導能力をも充分に伸展する事が出来なす。

戦術上戒むべき事が二つある。曰く「爲さざるなり、遲疑するなり」敵前に於て躊躇逡巡爲すなくんば、遂に全滅を免れない。教會が其費用の節減の爲にのみ汲々として、敢て何事も爲すなくんば、そは遂に其生命を失ふ。無謀の進撃は、過失なき退却よりも勝る場合が多い。失敗は怠慢よりも優つてゐる。而して教會一般の弊

は、無爲にして過す事である。斯くては新らしき指導者を、教會内に於て教養する事が出来ない。教會の役員も、現代の新らしい環境は、新らしい取扱を要する事を理解せねばならぬ。須らく現代教會をして進撃的ならしめよ。皮肉なる批評家はいふ、教會は、Like a mighty Army marching as to War、「出陣する大軍の如くに」と歌ひつゝ、其軍隊の最善の戦術は常に退却の戦法である。又曰く、「個人としては事業界に於て進歩的であり勇敢である人々も、一旦教會の役員として選舉せらるれば、直ちに臆病になり、恐怖心に驅られて、彼等の教會役員としての職責は、退守して進撃せず、教會を過失なき不活動に抑制して、冒險を避ける事に在るが如き觀を呈する」と。

(ホ) 教會制度の改造

教會の先輩が能く指導の任を果し、且つ將來の指導者を養成せんとせば、先づ組織の改善を要する。教會の制度組織は、傳統的に繼承されてきた。併し何れの教會

も、今や現代的に其の改善を圖らねばならない。教會政治の外部的方式が如何にもあれ、其の内容に於ては、皆デモクラシーの精神を以て充實されなければならぬ。教會の先輩者が、依然舊式の思想習慣に拘泥して、教権めいた貴族主義を固執するならば、現代の子は到底其指導の下に安んじて居らない。勿論世には反動もあれば逆轉矛盾を樂む心理作用もある、今の時代に及んで却つて教権を慕ひ、天主教に移り行く者さへもあらう。されど斯かる者が如何に多數ありとも、到底時代を指導する精神界の權威たる事を得ない、爲し得れば凡ての教會は總ての官僚臭味より脱して、基督教會こそ眞の兄弟主義が實現するゝやうにありたいものである、要は古い教権の様式の存否如何に係らず、人格的權威のほか、何ものも要せぬ民衆的精神の發揮されん事である。少くとも教會内に於ける役員會の組織の如きは、信任によつて選ばれるゝ以上、其名は長老たると執事たるとを問はず、皆同一の役員であつて何等階級的の意義なちものたらしめねばならぬ、其事務の分掌は種々に岐るゝとも、

皆悉く之れを同一名稱に由つて呼ぶのが寧ろ當然である。以下教會組織を如何に系統的にして活動に便すべきかは第七の部に於て縷述する筈である。

(へ) 教會生活の自由

デモクラシーの精神が發揮される處には必ず眞の自由が保障されなければならぬ、而して現代教會の恢復すべき自由は少くとも三つある、曰く、知識的自由と經濟的自由と宗派的自由即ち之である、傳統的、習慣的に之等三つの自由は屢々抑壓の下に在る。

知識的自由とは教義に關する見解に於て思想の自由を保障されん事である、獨斷はアウトクラシーである、人の作りし信條を其儘踏襲すべき筈のものとして、人の肩に負はしむるパリサイ的餘弊は、屢々宗教の陥り易い處である、其信條を更に形式にのみ存して、表面之に服従せるが如く裝ひ、内心之を承認し得ずとも、敢て妥協を企

て、良心の自由を抑えて、舊思想の獨斷に盲從する事が、人々に安神を興へ教會の平和を保つものとするならば、眞理の爲には泰平を來さんとあらで、刃を出す爲に來れりといひ給へる眞劍の生命は抜け去つて、教役者を神官僧侶の列に併置するに至るであらう、良心の自由即ち人格を售て不活動の泰平に安んぜん事は、基督の徒の耐へ得べき處ではない。教會は絶対に知的自由を興へねばならぬ、即ち傳統的信條を破毀して、基督の眞精神を開發すべき事を、其牧者に望む迄に改造されなければならぬ。經濟的自由とは教會が資本主義的色彩を免れ、所謂右の手の爲す處を左の手に知らせる事なき迄に献財の精神が淨化されて、經濟上會員の自治が實際に行はるゝ迄に至らん事である。米國の或教會に於ける如く坐席の買占の如きは頗る貴族的である、凡ての席は自由に解放される事を要する、又多數教會の教會費制度も考慮を要する、朝拜の献金を以て經常費を支辨し得る迄に献財の信仰が改造されねばならぬ、或極端なる一教會が牧師の榮轉を希ふ爲に、兵糧攻めの手段を弄したといふが如

醜態は、經濟的制肘の下に在るからであつて、爰に制度改造の要がある、十分一
献財は昔の時代と異なり今日の經濟組織に於ては甚だ困難である、少くとも一ヶ
月に一日を此目的の爲に聖別して、其所得を献ぐる事が出来やう、或者は總ての者
が此標準による自發的努力をなすに至らば、教會は恐らく裕に經濟的自由を贏ち得
るであらうといふ。我が靈精の教育を受くる教會事業の爲に、現代の信徒は一夜の宿
料にも價せぬ月約献金を以て、尙大なる奉仕をなした積りで居るのではあるまいか。
宗派的自由とは協同の保障をいふのである、如何に近代に於て半熟の基督者が宗
派に捕はれ居るかを見よ、其影響を感じぬ者は、極めて寛容なる眞個の基督者か、
或は極めて冷淡なる空名のみのである、滔々として世の基督者其多くは宗派信
者である、斯くて教會が世に威信を保つ事は望まれない、總ての教會は其會員をし
て此方面に於ける自由を得せしめねばならない。

(ト) 現代教會員の自覺

我らの國籍は天に在り(ヘリビ書三ノ二〇)

羅馬の市民權を有する事は、當時其權勢の旺盛を極めた時代に於ては、大なる特
權であり、光榮であつた。ビリピの自由市に於ても、此特權を有せる者が多くあつ
たであらう。而もそれに比して、神國の市民たる事が、如何ばかり大なる光榮であ
らうか。パウロは比較を以て信徒の自覺を喚起せんとした。第一に社會生活の状態
を顧みれば、地上王國の市民權を誇る者も『彼等は唯地の事をのみ思ふてゐる』己
が腹を其神となし、肉慾肉感の世界に耽溺し、己が耻を知らずして其譽となし、野
卑なる生活に満足してゐる、之に比すれば神國の世嗣である基督者の生活の、如何
に美はしいものがあるかを指摘した。

社會生活 上常に三種のものがある。一は羅馬時代の如き肉體的頹廢の裡に在る

もの、他は此穢土より超越して自らを潔ふし、世捨人となり、厭世悲觀に傾き易い、聖けれども屢々非常識のものである。基督教の指示する態度は恰も其中間に位する、基督の祈は「彼等を世より取り給へと祈らず、唯彼等を護りて惡に陥らす勿れと祈る」のであつた。罪人の友として、其救の爲に常に觸接を保つのが、彼の方針であつた。恰も泥中の蓮の如く、其足は假令罪の泥沼に立つとも、其麗姿は清艶よく脱俗の趣を備へねばならぬ。何となれば「我らの國籍は天に在る」からである。

第二に教會生活に於ても亦三様の立場が認められる。即ち一は教會信者ともいふべき者であつて、自己教會の利害の爲には基督者としての動機を外れる事さへある程に熱心な者である。彼等は地に屬する者であつて、決して其國籍を天に有する者ではない、然るに又其反對に宗派心を有せぬ事を誇りとなして、自己教會を無視し、甚だしきは横車を押す事を以て任じ、其の現在の靈のホームを忘るゝ者もある。人は稍もすれば極端に傾き易い者である、共に天上の國籍を慕ひ、地上の教籍を以て、

恰も分家せる者の如く思ひ見るのが、直き靈を有せる基督者の態度である。即ち教會意識を有すれども決して之に囚はれず、同時に教會聯盟の裡に廣き神國の擴張を圖る心持である。

第三に國民生活に就て之を考へても亦同じく三種の思潮を見る。則ち一は國家至上主義のうち極めて偏狭なるものであつて、唯國家の目前の利害打算のみに急にして結局國の損失を招く事を解せぬ程に頑冥なる態度、他は極端に之と相反して自己の國家を無視し或は冷視して、世界國を夢むるやうな者である。過ぎたるは及ばざるが如しで、兩者共に健全なる立場ではない。眞理は蓋し其中間に在る、己が家族を忘れぬと同様、國家同族を忘れぬは人情の自然である。唯之が爲に盲目的になつてはならない。世界は共存の時代となつて漸次之を一の法治國と爲すべき傾向を生じてきた。其人心の趨く處を察して、國家意識を失はず、同時に各國諸民族と提携して、人類共存共榮の爲に貢献せんとする聯盟の態度こそ、現代國民を安定の地位に

置く所以である。而して之は其國籍を分家たる地上に置くと共に、本家たる天上に有する程の自覺ある者にして、始めて正解し得る立場である。

斯くヘーゲル哲學の「正反合」なる三樣式に當りて、今や總ては其綜合の立場を要する。而して人類生活上、之は所謂聯盟の理想となつて表現してゐる、一個人の幸福は國家の安泰によつて保障せられ、一國家の幸福は世界の平和人類の安泰に依つて保障せられる。萬民悉く靈的の神國に屬し、其國籍を天に有するに及んで、差別の裡に調和があり、種別の間統一のある實際的幸福の國家が實現せられるであらう。

今や全人類の要する者は、此靈的意識である。各國民族は各其特長を發揮して人類文化に貢獻すると共に、皆悉く神國民の自覺に達せねばならぬ。基督教の使命は此靈的意識の培養に在る。

從來諸國民族の有せし選民思想は茲に於てか必然聖化擴大されなければならぬ。

之は美なれども屢々誤られ易き思想であつた。猶太人は之に由つて、其宗教的天才を發揮した。けれども又彼等を誤つたものは、此選民思想であつた。ゼルマン民族が超人を戴いて世界支配を夢みたるも其禍の原因であつた。支那が中華を誇り、日本が大和民族を振廻すのも、亦今は省慮すべきである。國家的の選民思想は、既に過去の時代に屬する。それは結局思想上の貴族主義に外ならなかつた。各民族が自ら誤れる其自負心より救はれんが爲には、此貴族的選民思想を平民化する必要がある。民族的のものを人類的に發揮せしめねばならぬ。地につけるものを、天上靈界の者と聖化する事により、選民思想は能く人類を祝福するであらう。

何をか平民的選民思想といふ。之は基督教によれる神國民の自覺に外ならぬ。人は皆神の子である。之を自覺せざる者は其國籍を天に有せぬ者である。凡そ自覺のある處には特權に對する感激が伴ふ。基督者は一種の特選階級と自覺する、而もそは貴族的の代りに全然平民的のものである。今其理由を述べやう。

パウロは「母の胎内に在りし時より我を選び別つた」といふた。之は生れ乍らの特権である。加州に於る邦人の子が米國市民たるやうに、又昔羅馬に於けると同様之は生得の特権である。基督はまた「汝ら我を選ばず我汝らを選べり」といはれた。之は恩賜による特選である。羅馬にもあつたか、加州の邦人中にも歐洲戦に従軍して、米國市民権を獲得した者もある。之は賦與されたる特権である。而も何が故に勅選議員の如く選ばれし少數たるかと問はゞ、それは全く奉仕の爲である。其特権は地上の特権と異なり、世に於ては惱を受け、人の爲に苦しみ、愛によりて忍び、神の爲に努むる事を意味する。之を稱して平民的選民思想といはずして何といはう。此思想は天に國籍を有して地上に「遣はされた者」といふ自覺を與へる。地上の生活は假の宿りである、旅人である。天上よりの寄留者である。分家した者である。故に決して地上浮浪の徒ではない。無籍者ではない。育ちや血統は争はれぬものと、遺傳の感化の大なるを知る以上、此自覺ほど人類に向上の

インスピレーションとなるものはない。一國の大使は數年の間異郷に駐在する。けれども彼は遣はされた者である。彼は郷國に在る其背景を忘れない。彼が樂しむ異郷の山川も、夢寐の間に皆古里へと通ふのである。それは光榮であると共に特権である。同時に彼の一舉手一投足は、其背後に在る國家全體の榮辱に關する。之れは彼をして苟も野卑なる行動に出づるを得ざしむる所以である。我等は足一度外國に出で、始めて國家の恩典を解する。我等の旅券に記さるゝ日本臣民としての國籍は、世界何處へ旅するも心強き背景を與へる。猶太人は其國を失ひ、世界に流浪散在の民となつた、爲に偶世人の指彈を受くる下劣の品性に傾いた。人類も亦天に其國籍を有する者にして、始めて心強く世に立ち、堅く自ら持する事を得るであらう。大羅馬の市民権よりも更に光榮ある特権は、國籍を天に有する神國民の自覺であつた。今も亦其通りである。現代教會は基督者をして明確に此特権を獲得せしめねばならない。それには教會員が先づ自ら神國民に

適はしい生活を、卷頭より述べ來つたやうな理想に従つて實現せねばならぬ。

五、現代教會の宣傳

現代はプロバガンダの時代である。由來宣傳を其特色としてきた基督教會も、今や稍々其特長を磨滅されて、他のプロバガンダに追ひ越されたかの觀がある。近代に於ける社會主義や過激派のプロバガンダの如きは、十八世紀以來の外國傳道や、現代教會の宣傳運動よりも、遙に巧妙にして且有効なるかの感がある。一種の主義を以てさへ尙且つ宣傳に努むる。況んや人類最終の幸福を保障すべき福音の宣傳に、教會は何ぞ躊躇する必要があらうか。更に有効なるプロバガンダを考究すべきである。

(イ) 教會宣傳の意義

凡そ宣傳を企つる者は確信の上に立たねばならぬ。教會は現代社會人生の諸問題

に就て、解決の光を與へ得べき明確なる意識の上に立つてゐる、されど今日まで其
宣傳の奏効遅緩なる所以のものは、教會自身存在の意義を發揮せぬ爲であつた。

教會は其自身の爲に存在するものではない。それは單に會員の爲の機關たるのみで
はない。教會は其周囲の社會の爲に存在し、會員以外の者の奉仕の爲にも設けられ
たる機關である事を、今日まで餘り考量せられなかつた。而して偶々行はるゝ傳道
運動が其唯一の宣傳方法であつた。斯くて其使命を發揮せんとする、素より不充
分なるを免れない。

教會の問題は分配の問題である、如何にして頒布し得べきかを考ふる處に、其使
命がある。されど現代の如く教會が社會と隔絶して居つては、到底其使命を果され
ない。世間は勿論教會を敬遠してゐる。彼等より近寄り來るは容易の事ではない。
素より失ひし者を尋ねて之れを救ふのが教會の責任である。進んで接近するのは、
教會の側より先にせねばならぬ。教會は其中にある九十九の羊を野に置き、往いて失

はれし一匹を尋ね求むる態度を要する。

一教會が市民の間に其存在をすら認められぬは、宣傳の不徹底を意味する、現在に
於ては教會なる精神的の機關が、市民の幸福の爲に存在して居る事を解せざる市民
も決して尠くないといはねばならぬ。教會なるものは市民の意識の流域に入らない。彼
等の注意を促す程の者がない。他の様々なる興味は、彼等の注意を奪ひ去つてゐる。

(ロ) 一般的注意の喚起

教會は全市民の注意を惹く丈けに、有力に挑戦せねばならない。何れにしても教
會の訴ふる處が、總ての人に一種の刺戟を與へて、彼等が之れに對し何とか言はね
ばならない程に、宣傳される事を要する。

世人は美人や跛者や、裸足の子を見ても、其神經中樞に何等かの刺戟を受くる。
放れ馬や蒸汽唧筒や、狂犬を見れば、神經細胞の破裂を來たす。其反響は惹起され

たる興味に比例する。圖書館や旅館や、學校の前を過ぐる時にも、何等かの感興がある。教會の前を通過する市民が、夫以上に精神的の刺戟を受くる迄に、會堂の建築も設備も整はなければならぬ。それは有力なるプロパガンダである。教會は其必要なる施設を爲すのみならず、少くとも其町内の人々にそが存在の意義を周知せめたい。

八百屋の店頭の商品は、主婦の視線を奪ふであらう、雜穀屋の米俵は、更に注意の的ともならぬ。幾多青年を墮落に誘ふ施設は、不斷のプロパガンダに由つて、其心を刺戟するやう巧妙に出来てゐる、而るに市民の靈的幸福を願ふんとする教會のみ、顧みる者だにないとするならば、爰に愈々此方面に眠れる市民の靈眼を覺醒すべき必要がある。吾等は都市亦は町村の生活中教會を數に入れしめたい。それには教會が其市民の爲に、何か奉仕せねばならない。人々が教會を何かの價値ある機關と認むる迄に宣傳せねばならぬ。則ち何等かの方法を以て、兎も角も市民の意識の中に

教會を容れしむべきである。

(ハ) 教會廣告の心理

現代は廣告の世である。事業界に於ては廣告が最大の武器である。聖書中にも廣告(アドバタイズ)といふ文字は二ヶ處であるが、宣ぶる(パブリッシュ)といふ文字は、百回も用ゐられてある。正當なる廣告宣傳の方法は、最も能く教會の存在を周知せしむるであらう。其直接の方法は、近隣の住民に教會が平素何を爲しつゝあるかを知らしむる事である。而して廣告宣傳の盛なる當代に於ては、教會が更に斬新なる進歩的方法に依つて其宣傳を企てなければならぬ。

教會は常に開放的に來會者を歓迎せんとしてゐる。されど世人が爾かく歓迎される事を感じないのは、接伴や宣傳に廣告の心理を應用しない爲である。教會の廣告宣傳に反對する者のいふ處は、畧ぼ次の如くである。

- 一、神聖なる事業が、如何にも通俗化される。
 - 二、それは宗教を安賣する如くに見えて權威を損する。
 - 三、それは説教者其人の威嚴に關する。
 - 四、それは靈的のものをも物質化する傾向を有する。
- 此等の反對説には、依然貴族的教權に執着する感情が溢れてゐる。若し夫れ教會
が有難からしむる慰安を説き、御利益を述べらば、それこそ俗化の甚だしきも
のである。されど最も健全なる眞理を鼓吹せんが爲に、接觸の道を講ずるに於て何
等俗化の虞はない、廣告は傳へんとする理想を、具體的に表示する事である。そが直
に俗化を意味するものではない。神聖なる家庭の光景は面り之れを見ても、或は繪
畫に之れを表示しても、決して俗臭を帯ぶる筈はない。同様に教會も廣告宣傳の爲
に、俗氣を呈すべき理由がない。
- 次に廣告を善用すべき積極的の理由は左の如くである。

- 一、それは確信より生ぜる熱心と生命とを表示する。
 - 二、それは教會が現代に對して使命を有し、現今の諸問題に關し、努力する事を告知する。
 - 三、それは人々の其る處に往つて之を接觸する。
 - 四、それは宗教思想を能く他のものと關聯しめて考へさせ、特殊の縁遠いものとなす一般の誤解を匡す。
 - 五、それは教會が市民の精神的要求に應ぜんとして、奉仕の準備をなしつゝある事を示す。
- 教會廣告は決して教會自身の爲にする所以にあらずして、單に奉仕の爲の失費を負ふ事である。爰に其効果があり、價値がある。何となれば由來基督教の特长は教會の爲に人を導かんとするのではない。教會よりも常に人々を心に留めたものである。然り人々は教會の爲に存するにあらずして、教會は民衆の爲に存する。教會の事業

は民衆の精神を改造し、其標準を高め、其生活を向上せしめ、彼等を基督の従者と爲すに在つて、教會員を造るのが最初の目的ではない。それは當然の結果として、到達すべきのみである。此動機よりして不斷に倦まず進撃的に行ふ廣告は、世をして教會が其高尚なる事業に熱誠なる事を知らしむるであらう。

(二) 教會廣告の方法

教會を宣傳する方法は、種々其周囲の事情に因つて工風されなければならぬ。而して常に所謂アツプ、ツ、デートの方法を考究して、能く廣告心理を應用し、兎も角も常に此方面の注意と努力とを忘れないやうにせねばならぬ。左の數種は實際行はれ得べきものである。

- 一、個人的宣傳
- 二、宣傳委員の活動

- 三、新聞の廣告及利用
 - 四、一般郵便の利用
 - 五、揭示板の利用
 - 六、教會月報の利用
 - 七、電燈装置の利用
- 教會員は從來に優つて、教會意識の發揮を要する。それは必ずしも教會根性亦は宗派根性の養成を意味しない。唯教會の使命を自覺して、愛教會の精神を發揮し、爾かく其言行に表示する事である。
- 教會は自慢する會員を要する。それは自負を意味しない。唯來りて見よと宣傳する口を要するだけである。教會の友たる者は、悉く廣告に努むべき筈である。常に教會に就て話し、日常會話の中に、俱樂部に於て、電車内に於て、家庭に於て、教會のよき事を語り傳へよ。教理を説明するは難い。けれども教會の宣傳をなすは容易

である。斯かる會員を有する教會は、必ず盛況を呈する。而して宣傳委員は特に種々考慮を費やして、教會宣傳の事に當るべきである。

次に新聞の廣告は、極めて有効である。日曜講壇として新聞社に於て掲載するものも、缺かさず原稿を供給して掲げしめ、亦特殊集會毎に其雜報記事を挿入せしむる方法を取るも有効であるが、更に廣告料を支拂ふたものは必ずそれ丈の反響がある。新聞廣告は市民の耳と目とに訴ふるからである。米國の人口五萬以上の町に於ては、毎週一回一頁の廣告がなければ、注意を惹かぬといふた人がある。大靈道の廣告を見ても、蓋し其効果が察せられる。

郵便の利用も、屢々閑却され易い。僅に一錢五厘を以て、能く誘導の務を果す場合が多い。否、廣告郵便の利用に由つて、僅少の費用は屢々充分に宣傳の目的を達せしむる。

廣告揭示板の利用も、亦思ひ設けぬ有効の結果を見る。之を見て教會に導かれし

青年もある。更に立看板も流行するが、或は電車内の廣告貼付も試みられやう。

教會には月報、亦は禮拜順序等の印刷物があれば、常に之を利用する事に心懸くべきである。米國に於ては、ホテルに之を配付し來るものもある。

廣告の装置として電燈を利用する事は、都會に於て殊に有効であらう。米國の或市に於ては、會堂の塔上に在る十字架がイルミネートされて、而かも時計仕掛で回轉するものがあつた。會堂の建物と相俟つてそは著るしく人目を惹いてゐる。

(ホ) アツピールの態度

教會は其アツピールに依つて市民に接觸すべきであり、同時に之に依つて必要を感じしめなければならぬ。而して時代の氣分は、著るしく變化してゐる。教會が昔ながらのオートクラチックな態度で、所謂お爲めごかしに救の專賣特許権を有するが如き方法であつては、到底現代の子にアツピールしない。從來の方法は、古へ

のモーゼ式であつた。

「我と共に來れ、汝に幸を得せしめん」といひ、信ぜざれば地獄の刑罰を免れないといふ態度は、最早や現代人に共鳴を見出す所以ではない。又若し斯かるアツピールに動かされて恐怖する程の靈魂であつては、基督の信仰理想に向上する事は容易でない。現代の氣骨ある者は、自家の運命を展開せん事を期して、何人にも依頼せぬまでに、獨立自治の精神に發達してきた。其求むる處のものは、其れ自身の救を働らき出さん爲に、機會を興へられん事である。斯かる高尚なる標準に生くる者が、救は汝の要するもの、教會に加はつて其利益を得よといふ態度に、共鳴すべき筈がない。須らく男性的の精神が共鳴し得る處を考量し、之れに訴ふる態度に出でなければならぬ。而して始めて社會の氣骨ある分子を、教會に包容する事が出來やう。

從來教會自身が活動的でない。奮闘的でない。故に活氣横溢せる有望の青年が望む如く満足を興ふる程、男性的奉仕の機會を興ふる事が出來ない。爲に人心は教會を離れ去るに至る。多くの人々の眞の願望は、自身が有用ならん事である。單に宗教が或種の慰安や氣休めの如くに解せらるゝならば、現代人は最早や餘りに多く宗教以外に慰安を得易くなつてゐる。彼等の時間は満ちてゐる。彼等の生活は安樂である。講演會や音樂會にさへも、彼等を引き出す事には相當の努力を要する。況んや教會の禮拜などには、其興ふる慰安の爲に出席する事は、甚だ困難になつた。故に教會が利益があるとか興味があるとかいふ事であつては、之れを感じぬ民衆が教會に接近する事は六ヶ敷い。茲に於てか吾等は民衆をして、教會は社會人生に最も大なる事業を企劃しつゝある、現代に於て其奉仕の男性的氣魄を發揮せんとする者の、協力を價する機關は之である事を意識せしめねばならない。

基督教宣傳の態度は、斯く飽くまでも賢明なる現代人の良心と、其氣魄とに訴へて、共鳴を見出す處に在らねばならぬ。「吾等は君の協力を要する、來つて君の眼

も、手足も、頭腦も働かせよ。君は此一大冒險の爲に投すべき尊とき資材を持つて居る。然り大業が今行はれつゝある。來つて手を携へ之れに當る希望はないか」といふならば、眞に氣慨ある人は誰も之れを拒む事は出来ない。之れ眞に社會人心を教導する所以である。されば教會の宣傳者をして、膝を交へてアツピールに努めしめよ。劣等者を訪ふ心持や、神聖なる教師として往くのでなく、彼が基督により神に近かん事を祈る至情より、兄弟として、熱望を以て人々を訪へ、斯くて教會は民衆の深い生活の中より、教會を榮えしむる新らしい衝動と力とを受くるであらう。

六、現代教會の奉仕

前既に屢々縷説したる如く、現代教會は外部社會と密接なる關係を結び、曾て隔絶して特殊部落となつた舊弊より救はれなければならぬ。之れ大戦後の社會状態に鑑み、爰に現代的の教育と宣傳とを企つるの傍ら、同時に社會奉仕の實を擧げん事を考慮すべき所以である。

大戦の人類に齎したる一般的教訓は、協同奉仕の精神、及び其訓練である。現代は既に利己的個人主義の孤立より脱して、人格は社會的に存在の意義を有し、且完成さるゝ事を解するに至つた。個人も國家も、此進運に伴はざるものは劣敗者たるを免れぬであらう。人格や組織の價値は、それが幾何社會公共の爲に奉仕するかによつて定まる。教會は素より此精神の鼓吹者であり、指導者であつた。社會奉仕を、今頃新に教會事業に附加した餘分の事業のやうに考ふるは、大なる謬見であ

る。

(イ) 社會奉仕の反應

教會の教育上にも、其宣傳の目的の爲にも、社會的奉仕は、眞に其反應を示すであらう。

(一) 一般教育界の弊害は、其發表上の訓練に徹底せぬ事である。獨逸や蘇國式の注入教育を踏襲した我邦教育の一大弊害は當に此點に在る。教會の如く最高の理想や道徳を取扱ふ教育に於て、之れが適應發表の訓練を興へぬ事は、怖るべき弊害を醸す原因となる。一旦喚起されたる興味と熱心とを、常に冷却せしめては又刺戟する間に、それは架空の概念に止り、遂に其生命とはならない。之れ屢々口に献身奉仕を稱へて、實行に矛盾を表はす者を生ずる所以である。教會教育は、須らく社會奉仕の道筋まで導かれなければならない。

(二) 教會宣傳の上からいふても、教會が社會の爲に何事かを考へ、且奉仕しつゝあるといふ事實以上に有効なる反應はない。之れは前宣傳に關して縷述したる總てを總括する處の有力なる宣傳である。人は聽覺に訴ふる宣傳に優つて、視覺に訴へらるゝ具體的のものに注意を喚起せられる。何等奉仕の態度を示さずして、唯己が宗旨を擴めんが爲に、我田引水の事のみ汲々たりと認めらるゝ教會は、其精神に於て既に基督より遠ざかりつゝあるものであつて、教會としての存在の意義を有せぬ。

古來大説教者は、教會内に立籠つて居るには、餘りに基督の精神に横溢してゐた。彼等は教會を本部として、社會を教會化せんと努力したものである、カルピンのゼネバに於ける、サボナローラのフロレンスに對する皆然り、ブツシユネルの如き、北米ハートフォードに働らざつゝ、其市に一大公園を設定して、今も尚ブツシユネル公園と稱へられて居るのを見ても、其社會的感化の跡を憶はしめる。教會や牧師

の價値は、其市民の幸福の爲に、何を企て、何を爲せしかに依つて定まる。各教會は其コミュニティーの爲に、奉仕の態度に出でねばならぬ。

(ロ) 社會奉仕の動機

教會事業は、教會内部に局限されては居らぬ。教會のみが牧師の職責であれば、彼は訪問と説教とを祭司的に行ふて事足るであらう。けれども生命ある教會は、夫れを以て満足が出来ない、教會は其働らき場所といふよりも、寧ろ其本部である。其働きの區域は、社會其ものである。牧師は決して教會の専有物ではない、それは教會が社會の爲に獻げたる器である。指導者としての彼の天職は、個人的品格と共に社會公共の爲に奉仕する精神的生命を發展すべき點に在る。教會は現代の學校と同様、社會國家に有用の材を生産すべき機關であつて、彼等を遙か未來の天國に當ぼびるやう造る事のみではない。現代の社會に生くる人格を造るに在る。目に見ゆ

る兄弟を愛し之れに奉仕する事をせずして、如何で見えざる神を愛するものといはれよう。此理想の不徹底の爲に現代教會の信徒は、牧師が徒らに多く外部に、其時間と努力とを費やすとして不平を唱へる。牧師は會員の慰めの爲に、日々其天機を奉伺し廻る爲めに、時を用ふべき筈であると望むほどに、驚くべき信仰の墮落を來たすのである。

教會が教育と宣傳との二大目的を果さんが爲の根本動機は、寧ろ夫れによつて社會に奉仕せんが爲である。前項に述べし處の反應は、決して爲にする處あつて社會奉仕をなすべき事を意味せぬ。何となれば教會全部の活動の動機は悉く社會奉仕の方法を指示して居るからである。福音の宣傳は、社會的存在としての人格に必要な福音を提示する事であり、宗教々育を施すといふも畢竟他の人々との交渉に於て、社會的に、政治的に、産業上に、如何に宗教心を以て生活し得べきかを教ふるに在る。

(ハ) 社會奉仕の方法

教會が直接社會事業や慈善事業を經營すべきか否かは、自ら第二の問題である。前既に社會的福音に關して述べた處と同意味に於て、社會奉仕を以て直に慈善的施設と解するのは皮相の見解である。亦インスチテュショナル教會組織が、未だ何處にも充分なる成功を見ざる現狀に鑑みても、尙此方面に研究の餘地がある。余はキング總長に就て其不成功の原因を尋ねたが、彼は「牧師其人の力量に依る、彼が其繁多なる事務の爲に忙殺される、底の者ならば、到底不可能である」と答へられた。要するにそれは未だ研究中に屬する。況んや資力貧弱なる我邦教會に於て、直に之れを實施するが如きは早計である。されど教會は其理想に立たなければならぬ、萬事斯かる社會奉仕の精神を以て、考量する態度があつて欲しい。而して時宜に應ずる處置が出来らるであらう。

一、會員の奉仕

教會は其後援の下に、會員をして社會事業に當らしむる事が出来やう。基督の教訓が徹底すれば、會員中、比較的社會奉仕が可能なる事情の下に在る人々は、何等か奉仕の實を擧げん事を望むに至るであらう。或は慈善矯風の爲に、或は貧者弱者の救済の爲に、或は人事相談紹介の爲に、或は學生寄宿の經營に、各々其爲すべき方針を授け、之が指導宜しきを得れば、寧ろ教會を社會事業の事務所となすに優つて、有効なる奉仕が出来るのであらう。

二、教育的奉仕

教會が直接取り得べき奉仕事業は、恐らく宗教々育に關する事であらう。而して之れは奉仕上根本的要求なるが故に、教會事業として直に實施すべき性質のものである。其一是宗教幼稚園事業である。小学校以上の兒童に對し週間に於て宗教々育を施さん事は研究題目の一つであるが、未だ我邦に於て容易に實現せられない。

さりとして教會が直接小學校の經營をなし得るものは決して多くない。幼稚園事業は此點に於て教會の實施し得べき恰好の事業であつて、同時に之れが運用如何によつては、神國擴張の上に、社會教育の上に、有効なる機關となるであらう。

教會の他の目標は、常に社會教育であらねばならぬ。教會の公開的集會は悉く此目標の下に企てられる。斯くて一層社會一般が、教會を自由に心易く往復し得る處と考へしめねばならぬ。之がためには禮拜所以外に、斯かる自由の集會を催し得べき設備が欲しい。日曜學校々舎として建設し、之れを双方に用ふるも一策であらう。その不可能なる教會に於ては、教會の集會が悉く型の如く祈禱を以て閉閉せねばならぬ禮拜所の習慣を破つても、或場合に於ては社會教育の爲に其會堂を開放するも、機宜の處置として止を得ないであらう。

三、公共的施設

更に教會管理の下に成し得べき手近な事業からいふならば、現今米國に於て盛ん

に行はれつゝある、兒童遊園の經營の如きは確に其一つである。之れ遊戯は教育の機會であるといふ理想に開始せられたものであつて、教會が若し廣い地所を有すれば、幼稚園の運動場と兼ねて、爰に數個の運動器具設備をなし、一般兒童を歓迎して其管理に任ずる事は容易である。或は市又は町村の共有地を開放せしめて、教會管理の下に其施設をなすも甚だ妙である。

其他一般市民の幸福の爲に、彼等をして文化的生活に達せしむる爲め、其社會的頭腦を開發し、其文化的施設の促進を圖るは、教會の一團が新理想の指導者として當に自ら任ずべき責任である。社會は肉體的にも道義的にも人間が分泌するものに依つて汚される、都市經營が完成せねば靈界も闇である、靈肉は一如である。新鮮なる空氣、衛生的なる衣食住なしには、神聖なる生活の保障が成立しない。

(三) 現代教會の方針

教會が現代に負へる新使命に向つて突進せん爲には、其プログラムが改訂せらるゝ必要を認むる。教會が其偉大なる目的を達し、使命を實現し得ざる所以のものは、由來社會の各方面の要求に應ずるプログラムを缺いて、現代生活に觸るゝ事が出来ないからである、多數の教會は一定の計畫なしに、たゞ行掛りの儘に漂流してゐる。教師自身も如何なる方針を以て其教會を指導すべきかに關し、明確なる意識を有せぬ場合もある。役員も會員も、教會が社會的機關として何を爲すべきかに關し見識を缺いてゐる。其教會の方針なるものは千遍一律、初代より繼承したものであつては、到底社會の進歩に伴はない。其プログラムは都市と田舎と、各々其環境に順應せるものであらねばならぬ。都會の多忙なる社會に於て、教會が不活動に止まるものは、十年の後全く社會より取殘されたる貌に陥る。

苟も神國建設を理想とせる教會は其事業目標に於て、更に包括的に社會的活動を加へねばならぬ。而して少くとも毎年實施せんとする豫定は明瞭に提示せらるべき

である。以て會員全部が本年の方針として、何に向つて努力を集中すべきかを意識し得るであらう。余は約一年の外遊不在中我教會に多少の犠牲は免れぬものとして豫期し居つたが、過去に於ける一定のプログラムによる會員努力の集中は、能く其缺陷を補ひ、最もよく其自治的能力を發揮して、大なる打撃なく過し來つたのを見て感謝に耐えない。たゞ亡びの子亡ぶるのみであつた、會員の協力自治に立つ者は最早や牧師に引づられて信仰の道を歩む時代を經過してゐる。(其目標の設定要領は之を次の章に於て述べやう)

所謂社會的本能を缺如せる者、猛獸の遺傳性濃厚なる者のみが、動もすれば孤立利己に陥らんとし、教會生活に於て奉仕を忘れ、批評を事とするに至る。又他派教會の誹謗排斥にのみ汲々として、其所に使命ありと感ずる迄に迷妄に陥る。これは宗教界の不具者である。教會は斯かるバリサイ的の種を戒め、飽くまでも埋没されたる其能力富源を展開する事に努め、之を社會奉仕の方向に伸展せしめねばなら

ない。多くの若き牧師が斯かる抱負の下に立つて、努力せんとする場合、教會は之れを解する迄に進歩し難く、現代に順應せる教會のプログラムは、徒らに空想と見られて、笛吹けども躍らざるに於て、若き牧師の一樣の悩みが認められる。斯くて教會は、有効の指導者を失はんとする危機に逼つてゐる。改善を要するもの多々ありと雖も、執着保守に傾き易い教會の態度こそ、其使命の爲に改むべきものである。

(ホ) 教會の現代的奉仕

社會奉仕は昔も今も變はらぬ教會の永久的使命であるか、殊に混亂せる現代社會に對して。此方面の努力を高調するは焦眉の急務である。此現代的福音の高調を目して直に個人の救済を閑却するとなし、婆心を以て曲解し、且批難するが如きは、思はざるの甚だしきものである。個人の罪や悔改を説くが如く、社會の罪惡や改善

を叫ぶ者を、脱線せる者のやうに見做す固陋の思想は、唾棄すべきものである。保守的精神が、基督の主義を社會的に各階級の間に適用する事に失敗して、現代社會の混亂を惹起し、それを國際間に適應する事を忘れて世界大戰を招き、救はれし個人を得たれど、神の國は何處にも實現されぬ失敗を來さしめたものである。されど今の時社會的奉仕の福音を高調する者は、前者の失敗を償はんが爲に、前代の人々の夢想だにもせぬ見識に立ち、更に熱心なる人道の精神、基督の犠牲奉仕の心を要する所以である。

今爰に米國基督教會同盟が、少くとも講壇より提示さるべき奉仕の方針として、發表されたる宣言の要項を掲げて參考に供する。

教會は左の使命の爲に起たねばならぬ、

- 一、生活の各段階に於ける總ての人々の、平等の權利及び完全なる正義の爲に
- 一、嚴正純潔なる標準の下、對等の離婚法と、婚姻に關する適當の法規と、相應

の住宅施設に由つて家族を保護する爲に

一、適當なる教育及び遊戯の施設に依り、各兒童の最良可能なる發達を爲さしむる爲に

一、兒童勞役の廢止の爲に

一、社會の生理的・道徳的健全の保護上、婦人の勞働に對する條件制定の爲に

一、貧窮緩和及び防止の爲に

一、個人及び社會を酒類販賣より來る社會的、經濟的、道徳的濫費より保護する爲に

一、健康の保護維持の爲に

一、危険なる器械、職業的の疾病及び夭死の禍より勞働者を救済するため

一、總ての人々が自信自重の機會を與へらるべき權利と、各種の壓迫に對し自己擁護の權利と、強いられたる失職の苦痛より勞働者を保護する爲に

一、勞働者の養老及び傷害負傷のため、就職不可能なる者に對する適當の施設のため

一、産業上の亂調を收拾すべき適當なる協調の方法を以て、資本家及被傭者相互の權利擁護の爲に

一、一週一日の公休を與へられん爲に

一、勞働時限を漸次實際上可能なる最低時間に遞減し、最高の人間生活の境遇に要すべき餘暇を得せしむる爲に

一、總ての業務に於て生活費として要する報酬を最低とし、各産業の與へべき最高の報酬を得せしむる爲に

一、資産の獲得及び使用に對し、基督教主義の適用に就て新たに高調し、且終局に企て得べき、最も平衡を得たる生産の分配を期するため

此等の宣言は教會の社會的信條を提示したものと云ふ事が出来る。何れの教會も

未だ會つて此標準に立つたものはない。けれども代表的の基督者は、何人も之れに異議を挿む筈はない。斯の如きを教會の社會的標準として承認したならば、教會の講壇も會員の努力も、大に從來の面目を一新するに至るであらう。社會の道德的精神的指導の任を負へる教會は、此現代的奉仕に就て、無關心なる事を得ない筈である。

七、現代教會の組織

(一) 教育的教會の原理

現代教會が種々なる努力奮勵をなしつゝあるに係らず、其發展の遅々たるものあり、牧師傳道師の焦慮奮勵あるに係らず、思はしき反響なき所以のものは抑も何であらうか。教會が社會の總ての方面と同一轍に往詰りを感じて居ると觀ぜられるのは抑も何が爲であらうか。或者は教役者の不熱心に歸する、或者は信者の怠慢を叫ぶ、又或者は信仰の冷却と斷ずる。夫等の一々も亦何等かの素因をなして居るかも知れないけれども余は教役者と信徒とが今日迄決して皆惰眠を貪り居るとは信じない、唯缺けて居つた事は其時間と能力と資源と材料との、經濟的使用と開發とであると見たいのである。爰に

(イ) 教會組織の改造

が必要と感ぜられる。散漫なる努力は濫費である。任意の奉仕は軋轢ともなり衝突ともなる。能力が需要に應じて配給されないならば、縦令幾何の發奮が繰返されても、所詮不徹底たるを免れない。現代の教會必ずしも其奉仕をなすべき生材料に乏しくはない、唯其埋没されたる人材と資源とを開發せずして放任して居る。奉仕の熱誠必ずしも現代の信者に缺けては居らない、けれども其能力を發揮せしむべき指導を缺いてゐる。教會が單なる昔ながらの格式に囚はれ、習慣に泥んで唯舊套の中に包まれ居るならば、到底現代に於て其使命を果す事は出来ない、今や其組織内容の改善を促す切なるものがある。

(ロ) 現代は組織の時代

今は組織の時代である。能力の經濟的使用を企つる者は、それが實業界であらうと、精神界であらうと茲に組織を重視せねばならない。小規模の家庭工業は大組織の器械工業と變つた。小資本の個人商店は大資本の會社と變りつゝある。コーポレ

ーションやトラストは晉にビジネスの問題のみではない。教會の活動も亦此根本主義に支配されねばならぬ。

現代は組織以外の何ものにも大なる信任を缺いた時代である。人に對する崇敬の時代、則ち英雄崇拜の若き時代は過ぎなんとして、過渡期に在る現代人は一切の人に對する信任を缺いてきた。先輩も偉人も其儘にして人心を引纏め之を指導する事の出来ないやうに人心は倦んできた。此一面殺風景に流るゝ人心を教養せんが爲に、要するものは組織でなければならぬ。素より或者は其組織に對する反抗を企て、放縱散漫なる自動をさへ自由と誤り居るであらう、けれども稍々落ついた人の心は、今や、組織的の事をのみ要求してくる。斯くて單なる感想による説教ならで、系統組織を有する連續的説教が寧ろ人々の要求する處となつてきた。

(ハ) 組織的活動の効果

教會組織の原則は屢々基督により保羅により教へられたる處である、即ち教會

は有機體としての組織と解せられてきた、或は基督を首とする身體に譬へられ、或は基督を幹とする枝に比べられたる悉く全體に生命の流れ居る事を示すものである。然るに現代教會の内部には、基督の生命が流れ通はぬ部分を生じてきた。其頭腦にのみ鬱血せるもあらう、其脚部にのみ血滯せるもあらう、基督の體たる一團體が、斯くて活動の元氣を喪失してゐる。之は筋骨の組織に缺陷あるが爲である、換言すれば教會が教育的に實施されない結果である。更に申さば宗教を教育的に取扱ふ思想が、今日迄の教會に缺如してゐた結果に外ならない。之は無理もない事である。第十八世紀以來著るしく勃興し來つた傳道熱に浮されて、僅に其餘瀝を止めた傳道地の教會が、當初より教育的教會を立つる程に、それ迄の見識を見開き得なかつたのも道理である。けれども今は既に半世紀を経過した我日本の新教は、爰に着眼せねばならぬ必要に逼られてきた、而して教會の新生面を開拓すべき唯一の活路は爰に横はる事を知らねばならぬ。今假に十年の年處を借さば、組織的活動の効果が歴然として

表現し來るであらう。唯毎年其場限りの方策を以て、教會の經營をなし指導を企つるのみであつては、恐らく幾十年を経るとも大なる發展は望まれない。神の國建設の爲には組織の必要がある、神の國其ものが決して散漫なる社會組織ではない、パウロの所謂「順次」に立つべきものである。「それ神は亂の神にあらず、平和の神なり」勢力の亂發も濫用も神の國の秩序ではない。教會役員計畫も、青年の活動も、婦人等の努力も、皆教役者の方針と相一致し平行して、其相互の重複を避け、又は撞着を免るゝ爲には、組織が完成されなければならない。又全國教會の協力に於ても組織は極めて必要である、例へば教育部の計畫と傳道部の活動とは、脈絡相通すべきが如き其一つである。之が爲には制度の改善組織の改革も必要である。素より宗教の根本は組織や制度ではない、之を論ずるが故に宗教或は信仰を閑却したるが如く思ふは甚だしき誤謬である。信仰や熱誠は之を保有するものとして、其充分なる活用の爲に、今は組織を論ずべきの時である。敢て曲解する者がなければ甚だ幸である。

(二) 教育的牧會と傳道

人の思想は一方に偏倚し易いものである。社會的福音としいへば直に社會事業の經營の如くに見做し、教育的牧會としいへば、傳道を全然閑却したる教會活動の如くに思惟する者もある。宗教々育を高調する者は傳道の不必要をさへ唱へる、傳道主張者は救靈運動が教育的牧會と没交渉であるかの如くに考へる。之れ皆心理的の誤謬に陥れる者である。

抑も教育は全生命に關し、全生涯を蔽ふものである。宗教々育は即ち傳道であり、救靈運動は教育的方法の一つでなければならぬ。例せば青年初期よりして多年教養の結果愈々花を咲かせ實を結ぶに至らんとする場合、爰に決心を促し回心を勧むるが如きは、決して不自然の方法でもなければ、又一夜の回心といふべきものではない、斯の如き経路を辿つてのみ傳道は其實際的效果を表はすものである。故に曰く傳道は教育の一手段であると、余が教會に於ける特殊の傳道をなせし統計を見る

に、悔改者中受洗したるものは其年度に於て九十九名であつたが、其うち現に教會出席を忘らぬ者は約半數であり、其半數の八割迄は會員家族のものである。之に由て明示さるゝ如く、傳道的効果の多分は平素の教育に俟たねばならぬものである。教育を離れての傳道は不徹底であり、傳道を閑却しての教育も亦損失である。況んや傳道的熱誠を以て信仰の教育をなす事は、由來基督教の特色たるに於てをや。教養されたる信者は傳道を勵むであらう、教育は播種であり、傳道は收穫である。教會學校に於ても、高等科以上に於て常に此靈獲を企てなければならぬ。

(二) 教會事業の組織

教會の精神的事業は一のオルガニゼーションとして、明瞭なる組織の下に置かれなければならぬ、唯會員や教役者の思ひの散漫なる事業であつてはならぬ。此場合教會は何時でも其中樞である、教會を離れて各種の事業を考ふるとも、そは決

して教會事業ではない。牧師は自己の事業を爲し居るのではない、役員は各自の意圖の儘に事業を企つるのではない、それは皆教會中心であらねばならぬ。

故に教會事業の組織の中心は教會であり、教會其ものは又市民の精神的機關たる理想に起つべきである。

(イ) 市民の靈的機關

教會は單に會員の爲の靈的機關ではない。會員は之を市民の爲に開放し提供するの心懸を要する。是は必ずしも教會を公會堂となさんとするの謂ではない。適當なる會館の施設のなき教會に於ては、禮拜所を世間の集會の爲に開放する事は不可能であらう。矢張り祈禱を以て始むる底の會合のみに用ふべきである。されど此靈的意義に於て教會は市民の爲に開放されねばならぬ。主イエスが「我には亦この檻のものならぬ他の羊あり、之をも導かざるを得ず」と宣ひし理想は則ち之れである、平素會員に列し居らぬ人の靈も、其人生の悶えを覺ゆる時に如何に教會や牧師を頼

りとなすかは、思ひ半ばに過ぎたるものがある。

(ロ) 教會事業の分類

斯かる理想の下に余が現在試みつゝある教會事業の組織は次の如くである。

一、教育的事業

- (イ) 教會學校 (冬季學校、少年夏期學校等を含む)
- (ロ) 幼稚園教育
- (ハ) 英語夜學校

二、傳道的事業

- (イ) 説教 (教理解説連續説教、傳道的説教を含む)
- (ロ) 講演 (文化的、社會的講演等)
- (ハ) 文書 (週報、教會新聞、各種印刷、著述等)

三、社會的事業

(イ) 社會奉仕 (個人的職業紹介、公共事業協力、兒童相談等)
(ロ) 慈善救濟 (任意的施樂施療、天災救助等)

即ち教育的事業によりて兒童と青年と大人の一部分とに接觸し、傳道的事業によつて青年の一部と大人殊に無産階級に接觸せんとする組織である、而して之等の事業を通じて、廣く家庭に接觸し、市民と交渉を保たんとするのである。(圖譜參照)

(三) 牧會事業の組織

市民生活の中樞として、教會が上述の如き制度組織を以て、市民と密接なる接觸を保つ間に於て、教會員の活動は自然組織的に、其陣容を整備されなければならぬ。

(イ) 教會員の組織的活動

會員總ての奉仕努力を最も能率多からしめん爲には、委員制度を採るべきである。而して夫々系統のある聯絡活動が豫期されねばならぬ。之は素より其教會の事

第一圖 教會事業之組織

(社會の中心としての教會)



第二圖 教會活動之組織

(委員會制度)



現代教會之組織圖譜 (1)